

ミルトンの失明をめぐる問題

宮 西 光 雄

一

ミルトンの生涯には三つの大きな断層があった。第一はかれの初婚における蹉跌であり、第二はかれの失明であって、最後は王政復古によるかれの幻滅であった。なканずく、もつとも深刻な衝撃をミルトンにあたえたのは、失明であつたと思われる。ケニス・ミューアは一九五五年の著書『ジョン・ミルトン』において、ミルトンには四回の衝撃があつたことをつぎのように述べている。

……一六六〇年のミルトンは、イタリアの諸学界に魅力のあつたミルトンにくらべて、いくぶん狭量で苛酷になっていた。しかも政治宣伝家としてのかれの活躍と、かれが約二十年間にわたつて、事实上、詩を放棄していたことは、災厄とまではならなくとも、危険であつたのである。それでも、代償はいろいろあつた。一六四〇年には、ミルトンは原罪と人間の墮落とを信じていたのであるが、その信じかたは、かれの信条の形式的な条項にすぎなかつた。それは「かれの脈搏にあてて証拠だてられた」(『キップ書簡集』ワールツ)ことがなかつたのである。ワーズワスの道義的な資質におよぼした大衝撃は、すなわち愛国心と革命的な理想主義との相剋は、かれがひとたび本性にたちかえると、かれを偉大な詩人に転向せしめる効果があつた。ミルトンの最初の衝撃は、ワーズワスよりもずっと年輩であつたときに、かれの初婚が、しょっぱなから挫折したことによるものであつた。第二の衝撃は、おそらくそれと同じほど重大であつたが、かれの離婚論諸冊子のこのましい合理

性、とみずからみなした事柄に賛成する容認によるものであった。それにつづく衝撃は、かれの進歩的な政治上の幻滅であった。そうしたことのすべての上に、かれの失明があった。(二二六頁)

初婚の挫折と、離婚論のための衝撃とは、一連の出来ごととみなし得るかと思う。ミューアの言説で、特に留意すべきは、ミルトンが原罪と人間の墮落を信じたことについて、一六四〇年のかれと、一六六〇年のかれとのあいだでは、観念的な信じかたと、実感的な信じかたとのちがいがあったことを暗示した点である。実生活における三つの断層による地ゆれが、その起因であることは言うまでもなからう。そしてその最大の起因は失明であると言えるのではないかと思う。失明によるミルトンの悩みは、『闘士サムソン』にまで尾をひいていたからである。ミルトンが失明したのは『英国民のための弁護』を発刊した後であった。その発刊は一六五一年の二月(リチャードは三月説)であったから、ハンフォードはミルトンの失明を「一六五一年(『ミルトン・ハンドブック』四版二〇頁)か、一六五二年(同上)とみている。一般にはあとの方の説になっているので、それによると、ミルトンはそのとき四十三才であった。しかもその前にはすでに左眼が失明していた。それで、ミルトンは右眼の失明を医師に警告されていたのである。それにもかかわらず、ミルトンは完全失明をも睹して、『英国民のための弁護』を書きあげたことは周知のとおりである。

失明に対するミルトンの心情や覚悟について述べる前に、失明者によるミルトン研究書が日本とアメリカにおいて、二十八、九年前に相ついで出版されたことを紹介しておかねばならない。一つは一九三三年に出版された岩橋武夫氏の著書『失樂園の詩的形而上学』であり、もひとつは、エリナ・ガートルード・ブラウン女史の一九三四年の著書『ミルトンの失明』(Milton's Blindness)である。前者は、ミルトンにおける文学と神学とのむすび

つきを『失樂園』によって研究したものであり、後者は、ミルトンの失明とその後の生活とに關することを科学的に究明した上で、失明がミルトンの文学におよぼした影響について考察したものである。前者の「緒論」では『失樂園』の成立事情をしめし、本論は三部門と結論になっている。本論の第一部は「失樂園における時間及び空間」と題して、『失樂園』における天文学と、人類学と、プロットについて述べている。第二部は「失樂園の文学論」となっていて、『失樂園』に關する「英文学史的背景」と、諸家の説と、詩形と、評價について論述している。第三部は「失樂園の神学論」で、まず『失樂園』と『キリスト教教義論』との關係を説き、後者の内容を解説し、さらにハリス・フランシス・フレッチャーの一九三〇年の著書『ミルトンのラビ学説の学識』(Milton's Rabbinical Readings 原題名は『ミルトンのラビ文献』となつてゐる)によつて「失樂園と諸ラビとの關係」を詳述し、そして「信仰の悲劇と其の勝利」で総合的な論説にまとめている。「結論」では、『失樂園』における文学と神学との表裏一体的な調和が力説されている。なお「補遺論文」として「失樂園の結句について」と題し、C・A・ムアの一九二一年の論文『The Conclusion of Paradise Lost』(PMLA, Vol. 26, No. 1)の訳文を採録し、「附録」に、ミルトン年表、ミルトン著作年鑑、失樂園刊行書史、参考書を書きそえている。ブラウン女史の『ミルトンの失明』では、第一部で、まず十七世紀の医学や衛生学が進んでいなかった時代相を概観したのち、ミルトンの失明の原因を科学的に追究し、第二部と第三部で、ミルトンの失明に關する自叙伝的な詩文や、私信によつて、失明後のミルトンの心境について考究し、第四部では、ミルトンにおよぼした失明の影響をめぐる諸問題について見解を述べている。そしてミルトンの失明に關する論文その他の詳細な「文献目録」と、「索引」をつけている。岩橋氏は青年のころ(二十、ニオ)に失明し、ブラウン女史は幼年のころ(五、六オ)に失明していた。ミルトンの失明は四十三オのときであつたのであるから、失明前の経験内容については大きな開きがあると思うが、両者ともに生まれな

がらの盲人でなかったという点で、両者の失明生活の経験談は、ミルトンの盲目生活に関して、大いに参考すべきことがあると考えられる。本論のなかでしばしば援用することになるので、まず両者の著書の概要について述べることにした。

二

ミルトンの失明の原因について、これまでにもっとも綿密な調査をした研究書は、ブラウンの『ミルトンの失明』である。著者は、多くの眼科専門の学者や医師の意見をもとめたり、在来ミルトン文獻にはもれていたこの方面のかずかずの参考文献をも調べあげている。そして証拠となるべき記録を、ミルトン自作のものや初期伝記者たちのミルトン伝から選定して、それを十一項目にわけて検討した。ともかく、ミルトンの失明について誰でも思いだされるのは、ミルトンが、シリアック・スキナーに寄せて書いた『ソネット』第二十二で、「この三年、この目は、外見には汚染(blemish)も斑点(spot)もないけれども、光を奪われて視力を度忘れしてしまひ」(三行)と言っていることと、『失楽園』第三巻の巻初で、「厚い黒、そこひ(drop serene)が眼球の光を消したか、または白、そこひ(dim suffusion)が暗幕をかけている」(二六行)と言っていることである。この二つのことは、ジョン・フィリップスが「ミルトン伝」で述べているつぎのことと一致する。「目だけは大きくて敏感でなかった。しかしかれの盲目は黒そこひ(Cutia Serena)によるものであるが、目には別にシミ(blemish)などはなかった。」(『ダービツシャー編書』初期刊ミルトン伝記集、三頁) 偶然の一致のようであるが、ジョン・フィリップスは、ミルトンの書いたものを頭に思い浮かべていたのかもしれない。ジョン・リチャードソンはつぎのように述べている。「目は失明していたけれども、かれ自身が言ったように、外見には汚染も斑点もないのであった。かれは、そのような目だ

と聞かされていたのである。」(同上書二) そうすると、ミルトンの甥で、かつてはミルトンの弟子であって、ミルトンの晩年まで親交のあったジョン・フィリップスは、ミルトンの失明した目がそういう目であることをミルトンに告げた人たちの一人であったとも考えられる。黒そこひ(amaurosis)のことをしめすラテン語の術語 *Gutta Serena* は「すんだ滴」という意味であるから、ミルトンのいう “drop serene” はその直訳の英語である。“suffusion” というのは、眼球の全面にひろがって、目がかすむようにするある種の液体で、ヴェリティによると、白内障(しろそこひ)か、神経構造の疾患によっておこる弱視か、または失明を言いあらわす当時の医術用語で、それに原因する失明はときおり “suffusio nigra” とよばれた。このラテン語の直訳が、ミルトンの “dim suffusion” となったことは言うまでもない。王立外科医術大学のフェロウであったアーノルド・ソースビーが、『英国眼科学雑誌』の一九三〇年七月号に発表した論文、「ミルトンの失明の真相について」は、ブラウンによつてしばしば援用された。上記の二種の眼疾についても、その論文から、「drop serene と dim suffusion とは、ちがった診断というよりむしろ、ほとんど同一のことをしめす二様の名辞である。」というソースビーの断定を引用して、ブラウンはつぎのように述べている。「*gutta serena* つまり黒そこひと、*dim suffusion* とは、似かよつた名辞であるから、そしてどちらも、人目には見えない影響をおよぼす疾患のことをさしているだけであるから、それで明瞭になることは、この十一番目の証拠から、われわれがひきだし得る唯一の推定は、盲目であることをあからさまにしめすものをミルトンの目はあらわしていなかった、ということである。」(頁二三) 要するに、ミルトンの失明した目は、なんの損傷もない綺麗な「あきめくら」になつていたわけである。それは、失明後のミルトンの肖像画をみればわかることである。しかし複製でみるその目には、一抹の哀愁がこもっているように思われる。ミルトンの知人であつたギリシア人のレオナルド・フィラスから、かれがパリに滞在しているあい

だに、パリの眼科医テヴノー博士に、ミルトンの失明について診断してもらおうにしようという書信をうけて、ミルトンが一六五四年の九月二十八日付で、ラテン語で書いた返書は、ミルトンの失明の症状について、もっとも確かな拠りどころになっている。ブラウンは、一八一〇年のW・ヘイレイの編書『クーパーのミルトン』からクーパー訳をかかげているが、ドニ・ソラはフェロウズ訳を引用しているので、後者の英訳文をつぎに邦訳してみよう。

……私の視力がよく鈍くなるのに気づいたのは、もう十年ぐらい前のことになると思います。そしてそのとき同時に、腎臓と腸が痛んで、おなかが張るのでした。朝、いつものように読書をはじめると、私の両眼がすぐにひどく痛みだしたので、すこし体操をすると、痛みはとれました。私が見た蠟燭は、まるで虹にとりまかれていたようでありました。その後ほどなく、左眼（それはもう一方の目より数年前に失明しました）の左側の視覚がすっかりぼやけるようになりました。そしてそのために、そちら側にあるものはなにも見わけられなくなりました。今度は右眼の視力が、約三年間に、徐々に、そして自分にもそうだとわかるほどに、消えうせていくようになっていました。それがすっかり無くなる前の数カ月間は、私が動かずに立っているのに、私の見るものがごとくあちこちに揺れ動いているようでありました。かたまった雲のような蒸気が、顔やこめかみにのしかかったみたいで、いつもはそのために両眼が眠くなるように圧迫されるのでした。そこで『アルゴ―船遠征隊』（アポロニオス・ロディ、オス作二の二〇五）の詩人フィネアスについて言われたことを、よく思いだします。

深いしびれが、朦朧としたこめかみをしぼり、

歩くと、くるくる舞いをしているようであり、

でなければ軽い失神で倒れて、ものも言えなかった。

言いもしなくてはならないことですが、視力がいくらか残っていたころ、ベッドに横たわって、どちら側かに寝がえりをした途端に、閉じた目蓋から、おびただしい光が殺到するのが常でした。その後、視力が日毎に減退するにつれて、もろもろの

色がだんだん薄れて、そして身内で妙な破裂音をたてながら、はじきだされて来るのでした。しかし今は、あらゆる種類の照明が消されてしまったようなものでありますから、私のぐるりにみなぎって来るものは、暗黒だけであります。それとも、灰色がかった茶色がまじって縞になった暗黒であります。しかし、私が絶えずうずもり浸っている暗黒は、夜でも昼でも、つねに、黒色よりも白色に近づいていくように思われます。そして目玉が眼窩のなかで回転しているときに、裂け目からさしこむように、ほんのちよっぴり光をうけ入れるのです。ところで、あなたの医者が一縷の希望の光をたきつけても、この眼病はぜったいに不治だと私は覚悟をしています。そして私は、暗黒の日々が、われわれの一人一人にかならずやってくるものだ(『伝道之書』第三、とあの賢者(ソロモン)が諭しているのですから、私が経験している暗黒は、墓場の暗黒ほどに重苦しいものではありませんので、神の不思議な恵みによって、文学の研究や、友情の元気づける挨拶のことばのなかで過ぎられるのだ、とつくづく思うことがあります。しかしもしも書いてありますように「これ人はパンのみにて生くる者にあらず、人はエホバの口より出づる言葉によりて生くる者なり」(『申命記』第八章三節)でありますならば、誰でも、その精神と良心に、神が眼を十分にそなえて下さっているのに、視力をなくしたことをなぜ甘受してはいけないでしょうか。神がかくも情あつく私に必要な備えをして下さる間に、神がかくも慈悲ぶかく手をひいて私を導いて下さる間に、私は盲目であることをかこつよりも、これが神の御意(みごころ)でありますので、むしろ喜ぶのであります。そして親愛なるフィラス君よ、この診断の結果がどうなりましようとも、私が山猫(やまねこ)の目をもっていた場合と同様に、元気で、落ちついて、ご機嫌ようと申しあげます。(『ボ
ン版第三巻五〇)
七一五〇八頁五〇)

ドニ・ソラは一九二三年の『ルヴュ・アングロ・アメリカヌ』誌第一号に、ボルドー大学医学部の眼科学教授カミュ・カバンヌと共同執筆で、「医学上からみたミルトン」(*Milton devant la médecine*)という論文を発表して、その英訳文を、一九二五年の著書『ミルトン・人思想家』の付録に、「ミルトンの失明」と題して収録している。それによると、上記のミルトンの私信から、つぎの要領で、六つの要点を摘記している。一、視力の漸

減的な制限、まず左眼が失明して、それから数年後に右眼が失明したこと。二、蠟燭のまわりの虹色の彩輪。三、色の視覚の漸進的な喪失。四、夜ベッドで寝がえりしたときに見た光。五、眼前の物体の動揺。六、失明期間中に、眼球を眼窩のなかでまわすと光線が見えた事実。これらの要点について、「はじめの三つの徴候は、視神経の退縮をとまなう慢性のおおそひ（glaucoma）の仮説を支持する。」（三頁）とドニ・ソラは言っているが、あとの三つの徴候はあきらかに「網膜そのものの障害」をしめしていると断定した。しかしそれは「網膜剝離」によるものではなくて、「遺伝梅毒」（hereditary syphilis）に原因する症状であると推定した。（六頁）ドニ・ソラはこの推定を裏づけするものとして、ミルトンが「小柄で、痩せて、消化器病にかかっていた」ことや、「一生涯、医者の手にかかっていた」ことや（どちらも甚だしく誇張、
（されていると思われれる））、「関節炎」にかかって手の指がふくれ、「痛風」で死亡したことを述べ、そしてその痛風のためのミルトンの苦しみは、『闘士サムソン』で「いわれもなく、放蕩時代の天罰をうける」（七〇三行）と言ったコーラスの科白を反映したとみている。（七頁）それから、ミルトンの母が弱視であったこと、ミルトンの長女アンが病身で不具であったこと、二女のメアリは医学上参考にならないが、つぎに生まれた息子のジョンは生後間もなく死んだこと、健康だったデボラは、のち結婚して十人の子供を産んだが、たいてい夭折してしまい、母よりも生きのびたのはわずかに二人であったこと、そして長女アンも結婚後初子を産んで死に、その子も死んだことを述べたてて、つぎのような結論になっている。

われわれはそれで、利用され得るいっさいの文書を考慮したのち、ミルトンの失明は、おそらく遺伝梅毒に帰因する全般的な不健康状態の、一つの結果としての眼精過労から昂じた、おおそひ風の眼疾で複雑化した網膜炎が、原因であったと結論する。

オリンパス山のような顔（すこぶる目だつ前面の突出）と、ほそ長い顔のあるミルトンの肖像画のすべてによつて、ある医師のいだいた印象は、まったく遺伝梅毒の見解に有利である。（三三三）（八三頁）

ところで、ミルトンの遺伝梅毒の遺伝の径路については一言の言及もなされていない。おそらく、ミルトンの母が弱視であつたという事実から、その径路を母かたの方に想定したのではないかと思われる。この点に関してブラウンも言っている、「ソラの暗示にしたがうならば、ミルトンの母の弱視は、母の病気が感染したのか、遺伝したのか、かいてもくわれわれはなんにも知らされていないけれども、梅毒の結果であつたと結論しなければならなくなるであろう。」（三〇）と。ソースビイは上記の論文で、「ミルトンの失明の原因としての先天性梅毒は、こじつけの理論であるばかりでなく、既定のすべての事実をおつぴらに無視するものである。」と述べ、B・F・ロイヤーは「失明の原因としての梅毒と淋病」という論文で、「出産前に感染したこの病氣は、視神経におけるよりも、眼球の前面の組織に見られることの方がありがちである」と言っている。（以上『ミルトン』後者によると、ミルトンの眼は「汚染も斑点もない」目ではあり得ない事情になる。ミルトンの母が産んだ六人の子供のうち、ジョンと、アンと、クリストファの三人が生存し、三人が死亡したが、ソースビイによると、そうした比率は当時では普通であつた。それにはまた、医術や衛生の発達していない時代を襲つたたびの疫病その他の流行病も考慮しなければならない。さらに「遺伝梅毒をうつされて生まれた赤ん坊は、たいてい生後数週間で死ぬる。」（三〇）というH・W・ハッガード説をもちだすと、上記の死んだ三人の子供のうち、タビサは二年半生きており、ミルトンの息子のジョンも二年生きていたのであり、なによりも、ミルトンの母が六十五才まで生きながらえた事実は、ドニ・ソラ説では説明がつかない。デボラの子供のことを言うならば、アン女王の十八、九人の子たち

のうち、女王よりも生きながらえたものは一人もないという歴史上の事実もある。ミルトンの「オリンパス山のような額」が、遺伝梅毒をしめす場合もままあるが、そうでない場合もある。ペーターヴェンやダニエル・ウェプスターはその著名な例である。ミルトンの「卵なりの顔」が梅毒の特徴とみなすどころもないのである。ミルトンの関節炎や痛風は、食事と当時の生活状態に原因がある。『闘士サムソン』におけるあのコーラスの科白で、ミルトンがかれの敵に対して、自分の先祖の罪で苦しめられているなどと公表するわけではないのだし、ミルトン自身は、かれの論敵をこそ非難するために、梅毒ということばをつかったのである。なおまた、ミルトンが失明したのは四十三才のときであって、それは、遺伝梅毒が発効するまでの期間をはるかに越えた時期であった。このほか詳細にわたる論拠によって、ブラウンは、ドニ・ソラの遺伝梅毒説を完膚なきまでに論駁したといえる。ドニ・ソラの論述には、専門家の協力があつたにもかかわらず、根拠の浅いところがあったように思われる。

ミルトンの失明については、ハインリッヒ・ムッチマンの白子説なるものもある。それはもっぱらミルトンの髪毛の色と顔の白さから推定したものであった。ヘレン・ダービッシャーの『ミルトンの初期伝記集』をみると、「かれはうす茶色 (light browne) の髪毛をしていた、かれの顔色はすこぶる白い (very faire)」と、^(三) ジェン・オーブレイは書いて、そしてその light browne の上に abrown と書きそえ、very の上に exceeding と書き加えている。^(三) ところで、ローラ・E・ロックウッドの一九一一年の編書『ミルトンの論文選集』の巻頭についてある「ミルトンの伝記集」の部に、オーブレイの「ミルトン伝」が収録してあつて、それを見ると、He had light brown (auburn) hair. His complexion exceeding fair. となつてゐる。(p. xxxviii) さらにデイヴィッド・マッソンの『ミルトン伝』では、「かれはうす茶色 (light brown) の髪毛をしていた。」とオーブレイは続けて言う、

——“light brown”の同義語として“abrown” (“auburn”)を余白に書きいれて。「(第一巻二) 七五頁」となっている。O.E. D. によると、auburn の語源は、古代フランス語の *alborne, auburne* であって、それは「白っぽい」(nearly white, whitish) という意味のラテン語 *alburnus* を語源にしている。そして auburn は「十六・七世紀では、*abron, abruue, abrown* と書いてあって、そしてそれらが、auburn を一種の brown (リチャードソンが実際に採用した語源) だとする見解を、おそろくつくりだすか、あるいはすくなくとも、助長したのであって、それでその語の意義を改変するように促進した。」と解説している。そして語義は、「(本来は) 黄色っぽい白色か、または茶がかった白色の」であり、「(今では) 金色をおびた茶色か、または赤みがかった茶色の」となっている。そして用例の一つに、上記の、auburn を light brown の同義語とみるマッソンの文をかがけている。文中にリチャードソンとあるのは、ミルトンの評伝を書いたジョナサン・リチャードソンのことだと思われる。ところでムッチマンは、auburn の語源のラテン語 *alburnus* (白っぽい) の意味を強調して、白っぽい髪毛は白子 (albino) の特徴であることを根拠に、ミルトンを白子だったと断定した。そしてミルトンの弱視や失明は、光によわい白子であったことに起因すると主張したのである。そこでブラウンはつぎのように論じて、ムッチマンの白子説を一蹴している。

ミルトンの目の、正確な色に関しては意見がまちまちである。青色というものもあれば、灰色というものもあり、茶色だというものもある。もしもムッチマンの理論が正しいならば、そのような不同はあり得なかったであろう。というのは、淡紅色の目であることが、白子の顕著な特徴であるからである。ムッチマンは白子の特徴をつぎのように述べている。「白子たちは真昼の明りをきらう。そういう明りのなかでは、目はひどく見えにくいのである。目をかけらすために、目の上に腕

か手をかざすことがしばしばある。かれらは眼振症（目が始終水平にゆれうごくこと）にかかって、絶えずまばたきをしていなければおさまらない」。（『ジョン・ミルトンの秘密』二〇頁） われわれはムッチマン教授にたずねる、顔つきがそんなに明瞭に異常である人が、どうして「クライスト学寮の麗人」になることができるであろうか、と。（二七）

そこでブラウンは、ミルトンの失明の原因について、英米の眼科学界の権威者たちの診断を私信で懇請したり、その著書や論文を渉猟した結果、科学的な見地から合理的とおもわれる病因を、「連鎖球菌の感染」と、「あおそこひ」と、「近視・兼・網膜剝離」の三つにしばって論述した。しかし、そのどれかであると断定することはさしひかえて、つぎのように問題を未解決にしている。

ミルトンの失明を誘発したとみなされる諸原因を要約すると、白色症 (albinism) や、遺伝梅毒の理論を支持する証拠はなにもないことが認められる。関節炎を併発することがあり得るような、連鎖球菌の感染という理論に賛成する医学の権威者がある。視神経の麻痺という理論を支持する学者もあるが、あおそこひによる解決を認める学者もある。あおそこひの理論にも有利であって、近視・兼・網膜剝離の理論にも有利である、医学上の証拠はすくなくある。以上に述べた諸原因のうち、連鎖球菌の感染と、あおそこひと、近視・兼・網膜剝離とが、もっとも合理的であるようである。しかし、われわれに伝わっている限られた資料や、十七世紀における眼科学の知識の不足や、英米における一流の眼科医たちの意見の相違を考えると、ミルトンの失明の原因は未解決のままになるのであって、またそうであるべきものである。（四八）

ついでながら、ミルトンが失明中に経験した暗黒のありさまに関連して、ブラウンは、「完全に盲目である人びとでも、ふつうに想像されているような真つ暗闇よりは、むしろ灰色がかった白いものを意識する人がいくらかある」。（一七）と述べている。また岩橋武夫はつぎのような経験談を書いている。

……元来中年失明者にあつては闇の意識は先天盲のそれではない筈である。然るにただ闇といへば、一点の光明をも認めざる暗黒の夜を想像することは誤りで、ミルトンにしても、著者にしても、かうした漆黒の夜に坐してゐるとは思はれない。なるほど、事実肉眼には何物をも眺め得ないにしても、心の視野とでもいふべきか、眼前は相応に光なき明るさに充ち、微動する無数の幻影をもつてゐるので、正眼者が想像する如き寂寥と単調そのものの闇ではない。而して闇の自覚を深くするのは、ものに触れ、音を聞ける際、その対象物を見能はずといふ意識の起る場合なるが故に、見得ぬといふ意識が年毎に薄らぎ行けば行くほど、闇の痛苦は和らげられることも事実である。(二七三頁)

ミルトンがさきにかかげた手紙で、かれの失明の闇について「灰色がかった茶色がまじつて縞になつた暗黒」と書き加えた事実と照合されることである。両者ともに、失明者なるがゆえに、失明詩人の経験がよりよく理解されるのである。この点に関しては、ブラウンが緒言でミルトン研究について、失明という「経験が似ている」ということだけで、私はより有能な批評家になっている。」と言明したことが首肯される。

二

詩のなかで、ミルトンがはじめてみずからの失明を題材にしたのは『ソネット』第十九であつた。つづいて『ソネット』第二十二と、最後の第二十三がある。まず第十九について、失明に対するミルトンの心構えについて考えてみることにする。

When I consider how my light is spent,

ミルトンの失明をめぐる問題

E're half my days, in this dark world and wide,
 And that one Talent which is death to hide,
 Lodg'd with me useless, though my Soul more bent
 To serve therewith my Maker, and present
 My true account, least he returning chide,
 Doth God exact day-labour, light deny'd,
 I fondly ask; But patience to prevent
 That murmur, soon replies, God doth not need
 Either man's work or his own gifts, who best
 Bear his milde yoke, they serve him best, his State
 Is Kingly. Thousands at his bidding speed
 And post o're Land and Ocean without rest :
 They also serve who only stand and waite.

生涯の半ばならずして、この暗い広い世界に
 わたしの視力は使いはたされ、しかもあの一つの才能が、
 それを隠せば死も同然だから、それでもってわたしの
 創造者つくりぬしに仕え、創造者つくりぬしが戻ったときに叱られぬよう、
 正しい釈明をしようと精神こんこうはさらに決意するのに、
 それが、わたしには無益に宿っていると思うとき、

「視力は絶たれても、神は日々の働きを強い給うか。」と、

愚しくもわたしはたずねる。だがその愚痴をはばんで、

『忍苦』は直ちに答える。「神が必要とし給うのは、

人の働きでもその天分でもない。神の軽いくびきに

最もよく堪えるものが、最もよく神に仕える。

神威は王者の如し。何干という天使が休みなく

神の命するままに、陸と海の上をかけまわる。

だが、ただ立って待つものもまた神に仕える。」

このソネットを読んで深く印象づけられることは、「あの一つの才能」(that one Talent)と、「それを隠せば死も同然」(which is death to hide)と、「『忍苦』は直ちに答える」(patience...soon replies)と、「神の軽いくびき」(his milde yolk)と、「ただ立って待つものもまた神に仕える」(They also serve who only stand and waite)である。『マタイ伝』第二十五章の十四節から三十節に、遠い旅にでる主人が、三人の下僕にそれぞれ五タラント、二タラント、一タラントずつ与えて、その金の使いかたによって忠僕かどうかをためす寓話がある。一タラント(talent)は、一八七ポンド一〇シリングにあたる金額であったそうである。ところで一タラントをもらった下僕は、それを「地に蔵し」ておいてそれを利用しなかった。主人が帰ってきたときに、ほかの二人はどちらも与えられた金額を利用して倍にしていたのに、その下僕は隠しておいた一タラントがあるだけであった。それで主人に「悪しく、かつ情れる僕」と言われて、「外の暗黒に逐いいだ」されたのである。このソネットの三行めの“that one Talent”とは、この放逐された下僕の一タラントのことをさしている。そしてそれは、諸

家の註釈でもわかるように、ここでは「詩作の才能」(poetic faculty)を意味している。ミルトンはかねて神から詩作の才能をさずかっていることを自覚していた。それで、その天与の才能を十分に發揮して、神の使命をはたさなければならぬとミルトンは自任していた。ミルトンが満二十三才になった一六三一年十二月九日か、その直後に書いたと推定されている『ソネット』第二では、天与の詩才のみのりのおそいことにあせりを感じながら、「わが仕事の督者」である神の「目にたえず見られている」ことを確信して、そのあせりをしずめることができた。そしてそうした確信のなかに、みのりはおそくとも、かならず大傑作は書けるという自負がこもっていた。ところが今は、失明したことによって、その天与の詩才が、あの下僕の一タラントと同様に、盲目の暗黒のなかに隠されてしまい、あの下僕の主人の仕うちのように、神から「叱られ」て放逐されるべき運命になったと、ミルトンは盲目の身を嘆いているわけである。それが、最初の六行に暗示されている「愚痴」(That murmur)であった。『ソネット』第二は、ミルトンが『ある友人にあてた手紙』のなかに書きそえたものである。その友人が誰であったかは判明していない。実際は書いたままで、発送はしなかったように臆測する向きもある。ケンブリッジのトリニティ学寮には、その手紙の草稿が二通りあるのである。コロンビア版の『ミルトン全集』第十二巻から、その『第二草稿』(second Draft)なるものをつぎに訳してみよう。『ソネット』第十九の真意を理解するためにも重要な資料になっているからである。

拝啓 お会いする時にはいつでも、お蔭で裨益する点がほかにいろいろあることを告白しなければなりません、その上にあなたは私にとってしばしば、そして特に昨日はそうでしたが、すぐれた夜まわりのようになって下さって、夜の間、が(と申しますのは、私はまだ無名であって、人類に貢献することのない私の生活をそういう風によんでいるからです)過ぎ

ゆくことや、キリストがみんなに明りのある間に働くように命ずる、昼が私にせまっていることを、忠告して下さるのです。そうして下さるのは、神があらゆる人においてあがめられるべきことを真実に念願なさる以外に、他意はないことを確信するからであります。そういうわけで私は、問はず語りに、機会のある度ごとに、この私のろい動きについて説明しなければならぬと思います。それも私の良心の戒告によつて申しあげるのです。私の良心が神に伴われないではないと私は確信するからです。しかしながら、私は今、おきまりの言いわけをこじつけるつもりではなくて、私の心がいと不安らかであることを公言できるように、将来どんなときにも私の心にそなわっているだろうものに、頼るだけのことであります。しかしもしもあなたがおっしゃったとおり、過度の学問愛好がまちがっているとお思ひになり、そしてラトムスの物語にあるとおり、月を友としたエンディミオンのように、ひきこもつてする勉学のなかに抱きこまれて、私の年月を夢みてすごすことに私が没頭しているのだと、思つていらっしゃるならば、——しかしこうした生活は、その根源であつた主義が善いとか悪いとか、当然だとか、そういうことにかかわりなしに、ただ単なる学問愛好にすぎないということであつたとしましたら、それは他方において、あらゆる種類のかくまでに強い反対があるのに抗して、かくも長いあいだ持続するはずはなからう、とお考へになるならば（というわけは、それがもしいいけないことでありますならば、生意気な若さと虚栄とに、利得だの、誇りだの、野望だのといつしよに備えつけられるあの空しい希望のすべてが、穿さく欲という、みすばらしくもうかつな無益の罪が私をひきとめうる場合よりも、もっと力づく、前進するように私に呼びかけないのはなぜでありましようか。そうした穿さく欲によつて、人はあらゆる活動からわが身を遮断し、この世でもっとも頼りない、無気力な、なんの武器ももたないものになるのですから。味方を防衛して味方に役だつとか、それとも敵を攻撃するとか、どっちかのためにすべての人びとがもっとも切望することを実行する資格も、能力も、最低にしかもちあわせない人間になるのですから。）——それとも、こうした生活が、自然な、ありがちなことと思うべきものでありますならば、それに対抗して、人間のこの年ごろでは、もっとも切実な要求をする、はるかにもっと強力な、しかも生得の性向が、つまり自分の家と家族をもとめる念願が、存在しているのであります。そしてそうした念願にとつてもっとも役だつと思われることは、信頼のおける職に早

くからつくことでありますし、もつとも障害になると思われることは、こうした孤独を氣どっていることであります。そのような念願だけでも十分効果はあるのですが、それにはまた、長く無名であることをうち切るようにしむける、純粹ではなくともお上品な働きかけが、もひとつあるのです。それは、眞の学究がごとく胸にいだいている、名譽や評判や不滅の名聲を得たがる念願であつて、すべての人びとがそういうものを得ようとあせり、将来そういうものを獲得するだらう業績を、そういうものを獲得しそもない業績と同様にあつかつて、ともかくも心にためこんでいる業績なるものを、公刊し發表するもつとも手とりばやい手段をとるのです。したがつて、天性は、みずからを抑制するのにそんな低級な性向しかもち合せないとしたら、それだけに一段と優勢な働きかけをさつそくにするにしよう。最後に、かくのごとき学問愛好が善きものを追究することでありますならば、それは、知られ表明されているもののうちで、こよなくすばらしい至高の善を追求して、そしてそうすることによつて、幻影や観念をむなしく非常識に追求することから、あの一タラントを隠した男を、すさまじくとつ捕えた、あの福音書の命令に對する、時宜にかなつた、正当な服従によつて、生ずる堅実な善の方へ、すみやかに転向するでありましよう。ですから試練をうけるように、出来るかぎり早急に前へ押しやることをしないで、くい止めるようにするのは、思弁のはてしない樂しみのせいではなくて、あの重大なおきてを、このように考慮すればこそである、ということの方がありそうなことなのであります。その場合、くい止めるということも、聖なる崇敬をもつてするのでありますし、また、より適格となるために、おそい方が有利であるならば、おそいことなどは度外視して、どうすればもつともよく試練をうけられるかという宗教的な熟慮をもつてするのであります。というのは、葡萄園の主が各自に賃銀をあたえに來たときに、もつともおそく來た連中は、ちつとも損をしなかつたからであります。

(『マタイ伝』第二十
章一―十六節參照)

そこで、ここにおいて私は、ナイル川のように、七つの流れ口から大海に水をはかすほどに広大な源泉に到達したのであります。しかしながら、私はまた、潮のさしひきを同時にする相互矛盾におちいつて、実行しないことの言いわけをしながらそのことを実行し、説教をしていながら説教はしていない、というようなことをしているわけになるでしょう。しかし私は私自身にいくぶん自信がもてず、私にはたしかにおくれたものがあることに、私が氣づいていることをお解り下さるよう

に、それだけにさらに大胆になって、すこし前の私の夜の思想のいくらかをお送りいたします。すでにお話したことのあるベトラルカ風の詩節で組み立てたものですが、その思想はぜんぜん見当ちがいの思いつきではないからであります。

How soon hath Time the subtle thief of youth,
Stoln on his wing my three and twentieth yeer!
My hasting dayes fle on with full career,
But my late spring no bud or blossom shew'th.
Perhaps my semblance might deceive the truth,
That I to manhood am arriv'd so near,
And inward ripenes doth much less appear,
That som more timely-happy spirits indu'th.
Yet be it less or more, or soon or slow,
It shall be still in strictest measure eev'n,
To that same lot, however mean, or high,
Toward which Time leads me, and the will of Heav'n;
All is, if I have grace to use it so,
As ever in my great task Masters eye.

巧妙に若さを盗む「時」は、二十三のわが年齢を
たちまちに、翼にのせて盗んでしまった！

急^せきたつわが日々は全速力で飛んでいく。

だが、われは晩春になって、蕾も花も見せはしない。

おそらくはこの容貌^{おとな}が、間もなく大人になる

わがまことの年^{とし}齢をいつわるのであらう。

ましてや、心の成熟はあらわれもしない、

それがそなわる早熟なものもあるのだけれども。

それは、量の多寡、到来の遅速はあるにしても、

「時」と神意にみちびかれてわがたどりゆく、

みじめであれ多幸であれ、まさにその運命に

寸分たがわず、つねに相応するものであらう。

すべてがそうなのだ、かく用いる徳がわれにあれば。

偉大なわが仕事の督^{おさ}者の目に、絶えず見られているのだから。(三二―三二五)
頁、地点は筆者

文面にはあとにまだ少し儀礼的な結びのことばがつづいているが、ともかく、二十三才のミルトンが書いた上記の文面にも、この『ソネット』第二にも、「一タラント」なる天与の詩才についての自信と自負がみなぎっている。しかも、ミルトンが『ソネット』第十九を書いたときには、この文面とこの詩が対照的に想起されていたとみられるふしがあるのである。それだけに、「あの一つの才能」を盲目の暗黒のなかに隠されたミルトンの嘆きは痛切であり、深刻であったと感じられる。「それを隠せば死も同然」ということは決して誇張ではなかったのである。天与の詩才が「無益に宿っている」ということは、ミルトンにとっては、神に仕える方途を絶たれたこ

とであった。たしかにミルトンは、失明によって、神の意図に対して疑惑をさしはさんだ時期があったように思われる。「視力は絶たれても、神は日々の働きを強い給うか」という質問を神にむかって言っているのである。しかしそれを「愚しくも」と自省したのである。そこに『忍苦』(patience)による悟りがあった。そして失明は「神の軽いくびき」であると達観することができ、そしてそれに「最もよく堪えるものが、最もよく神に仕える。」という信仰にたちかえり、そして「ただ立って待つものもまた神に仕える。」という信念によって、更生の途をみつけたのである。ただひとすじに神にとりすがって、いっさいを神にまかせる祈りの姿勢になっている。なるほど『ソネット』第二でも、「時」と袖意とにみちびかれていく運命に身をゆだねる態度をしめして、そして「偉大なわが仕事の督者^{おさ}の目に絶えず見られている」ことを確信しているけれども、それは『ソネット』第九にくらべると、根づよいエゴイスティックな自己意識が顔をだしていて、そしてそれにまつわる信仰が、観念的な構えになっているように思われる。ミルトンは失明によって、信仰の真諦に徹し得たといえるのではないであらうか。このことをさらに考察するために、『ソネット』第二十二をひきあいにだしてみよう。

*Cyriack, this three years day these eyes, though clear
To outward view, of blemish or of spot;
Bereft of light thir seeing have forgot,
Nor to thir idle orbs doth sight appear
Of Sun or Moon or Starre throughout the year,
Or man or woman. Yet I argue not*

Against heavens hate or will, nor bate a jot
Of heart or hope; but still bear vp and steer
Right onward. What supports me, dost thou ask?
The conscience, Friend, to have lost them overpy'd
In liberties defence, my noble task,
Of which all Europe talks from side to side.
This thought might lead me through the world's vain mask
Content though blind, had I no better guide.

シリアックよ、この三年、この目は
外見には汚染も斑点もないけれど、
光を奪われて、視力を度忘れてしまい、
この益なき眼球には、年が年中
日も月も星も、さては男も女も、見る力は
あらわれ出ない。だがわたしは
神の御業にも御意にも、苦情は言わず、
勇気も希望も、いささかも減退せず、
真直ぐに進むのだ。何に励まされてか、と
問うかね。友よ、それは自由擁護のための
過勞ゆゑに失明したという自覚だ。わたしの

高潔な仕事だった。全欧の津々浦々で話しているのだ。

この思いが、盲ながらにみち足りて、空しい現世の舞台を

通つてゆく手引きとなろう、まさる案内者^{しるべ}はなくとも。

このソネットにも、一年中「日月も星も、さては男も女も」見るこのできない失明苦の哀愁がただよっていることは言うまでもない。しかし失明の身であっても、ここでは拠るべきところに拠つて、どっしりと足をふまえた意欲的な立姿になっている。神に対して「正しい釈明」をなしうることを身をもって実証したという信念が、その拠りどころになっている。すでに左眼が失明していたミルトンは、視力を酷使すると、やがて右眼も失明することを医者に警告されながら、そうなることを覚悟の上で、『英国民のための弁護』を書いた。それは一六五一年の二月に出版されたが、そのあとでミルトンは完全な盲目になっていた。ミルトンの主観に即していえば、この「自由擁護」という「高潔な仕事」のための「過労」が、かれの失明の直接の原因であったのである。

ミルトンの右眼失明の時期は一六五二年か、その年までにと推定されている。そこで、このソネットは、失明後「三年」を経て書いたことになっているので、一六五五年作というのが定説になっている。一行めの“*this three years day*”は「この三年間」という意味であつて、「三年前の今日」というベルの註釈を支持するものはないようである。ところで、『英国民のための第二弁護』は一六五四年五月三十日（^{ハンフォード著『英国人ジョン・ミルトン』}グラントツ版一七三頁）に出版されたのである。それでこのソネットは、『第二弁護』の出版後に書いたものとみられる。そうすると、「自由擁護」という「高潔な仕事」をしたために、ミルトンがヨーロッパの隅から隅まで大変な評判になっていると言明したことのなかに、『第二弁護』についての世評をも考慮しているふくみがあると思われる。つまり、『ソネッ

ト』第十九において、盲目の闇のなかに隠されて、利用され得ないものと断念していた「あの一つの才能」も、盲目のままで大いに発揚し得ることが、『第二弁護』を書いたことによって実証されたのである。『ソネット』第二十二はそうした実証を背景において書いたものである。さきに訳述したように、『第二弁護』出版後の一六五四年九月二十八日付のフィララス宛のミルトンの手紙では、その結末において、失明したかわりに、「精神と良心に、神が眼を十分にそなえつけて下さる」ことをミルトンは確信して、失明ということのなかに「神の御意」をさとり、盲目の運命をいさぎよく甘受する積極的な態度が表明されていた。その積極的な態度はそのまま『ソネット』第二十二にもちこされているとみることができる。「神の御業にも御意にも、苦情は言わず、勇気も希望も、いさなかも減退せず」に、ただ「真直ぐに進むのだ」と、意欲的な行動性を明示したのである。しかも「高潔な仕事」によって、ヨーロッパ全土に名声を博したという「思い」だけにみちびかれて前進すると言っている。そして「まさる案内者はなくとも」と断言したのである。「まさる案内者」というのは、けっきよく「神の摂理」ということになる。『失楽園』第十二巻の結末で、アダムとイーヴが楽園から追われて行く情景をつぎのように描写している。

Some natural tears they drop'd, but wip'd them soon ;

The World was all before them, where to choose

Thir place of rest, and Providence thir guide :

They hand in hand with wandring steps and slow,

Through Eden took thir solitarie way.

おのずと涙落つれど、やがて拭いぬ。

行手に世界のすべてありて、安住の

地を選ぶべく、案内者は神の摂理なりき。

手に手を取りて、さすらいの足どりおそく、

エデンをたどり、二人さびしらに行きぬ。

「案内者は神の摂理なりき。」とは、『ソネット』第二十二にも適用されるものである。異なる点は、上記の五行の詩には、そこはかとなき哀感がこもっているが、このソネットでは、前半にそうした哀感がただよっているにすぎない、ということである。それは、このソネットの後半において、「神の摂理」という「案内者」はなくても、上述のような名声だけを念頭におくことによって、「盲ながらにみち足りて、空しい現実の舞台」をまっすぐに前進してゆけることを言明しているからである。『第二弁護』はラテン語で書いた散文であるが、盲目の身でそれだけのものを出版したという事実によって、「あの一つの才能」を発揮しうる自信がついたのである。また、「自由擁護」という「高潔な仕事」は、散文でなしとげたものであっても、それは神の使命をはたしたものであった。したがって、それは天与の詩才を発揮することによって達成しうる業績に直結するものであった。つまり、そうした仕事によって獲得した「名声」は、詩作による名声をも保証するものであった。すべて神意に即してのみ、発現しうる業績であるからには、そうした名声の「思い」だけを「案内者」としても差支えないわけであった。そうすると、「まさる案内者はなくとも」と断言したことは、実はパラドックスになっていたのである。そうした案内者が、すなわち「神の摂理」が、そうした生活態度をつねに支持するものであるという確信を述べたものである。盲目の闇に神の光がさしこんできた現実感の表明であったのである。そして、このソネット

を書いた一六五五年のころから、すでに『失樂園』の執筆をはじめたと推定する学説もある。一理ある見かたかと思われる。ついでに『第二弁護』のなかで、ミルトンがみずから失明について記述したことを、つぎにぬき書きしてみよう。そこにある文意は、フィラス宛のミルトンの手紙をへて、『ソネット』第二十二のなかに展開する、ミルトンの失明に対する態度や心境がしめされているからである。

……この野卑な論敵が私の失明について言ったことを、同じほどたやすく論駁することができたならばと思うのだが、しかし私はそうすることができない。そしてこの災いに屈服しなければならぬ。盲目であることは、盲目に堪えきれないほどにみじめなものではない。万一不幸になったら、あらゆる人が当然それに堪えなければならぬものであるからには、私が不幸に堪えるのがなぜいけないのであろうか。不幸は、ありがちな自然のなりゆきで、誰にでもおこることであるし、歴史上のもっとも卓越した有徳の人びとにもおこったためしがあったのである。神々が、不幸のつぐないに並すぐれた天賦の才能をさずけたといわれ、そして失明の原因を、純真さや美徳を欠いたことよりも、むしろ神の不当な仕うちにしたがるほどに人びとが尊敬する、あの聰明な古代の詩人たちのことを述べることにしようか。あのアウグル・ティレシアスについて伝えられていることは周知である。アポロニオスはその著『アルゴ―船遠征隊』で、かれのことをこう歌ったのである。

「人びとに、かれは臆せず神意をあらわに告げ、

ジョーヴが怒って課する処罰をも恐れはしなかった。

神々はかれに不老の長寿を譲りあたえたが、

かれの視力の恵みはうばいってしまった。」

しかし神自身は真理である。真理を普及することで、誠実と熱意をより多く表明するにつれて、人びとはいよいよ神に似かよってくるし、ますます神の愛をうけることになる。われわれは、神が真理をもの惜しみしたり、真理を人類に自由に伝えることをしるなどと想像してはならない。したがって、人びとのあいだに知識を増進することにかくも熱心であった、あ

の靈感に浴した哲人がこうむった失明は、天罰だとは考えられ得ないものである。……ところで、私に關しては、私は私の行為を正確に檢察し、私の魂を精査したのであるが、おお神よ、人の心の探求者よ、私は私の生涯の若いころでも、年々たかころでも、こんな不幸な天の配剤をうけるにふさわしいものとして、私を犯人にすることが至当であるらしい、どんな大罪もおかした覚えはないことを、立証してもらいたいのである。しかるに、私の論敵らは、この災いが私の文筆の罪に対する懲罰にすぎないと高言するのだから、私はふたたび全能の神に、いついかなるときでも、真理に、そして正義に、そして敬虔な信心に、一致しないと思ったどんなことをも、決して書いたためしはないことを立証するようにお祈りする。これが、そのときの私の確信であつたし、今も同じ確信を感じている。私はまた、野望に影響されたり、金や賞讃をほしがったりして、そのような仕事にそそのかされたのでもないのである。それはただ、義務の信念と、愛国の感情、すなわち、市民としての自由や宗教の自由を拡張せんがための公平無私な熱情とによるものであつた。そういうわけであるから、私が、あの国王の主張の『弁護』に対して応答文を書くことを公式に懇請されたときに、そして私が病苦や、のこりの片目の視力も間もなくなくしそうだという懸念と戦わねばならなかったときに、そしてかかりつけの医者たちは、私がその仕事をやりとおすならば、その視力もなくなつて、とりかえしのつかないことになると言明したときに、いささかもかれらの予告によつて躊躇することはなかつたし、少しもあわてふためくことはしなかつた。私は、私の胸のなかの天来の戒告者のお告げをさしおいて、エビダリウスの神廟から聞えるアエスクラピウス(医業と医術の神)の声にすら耳かたむけるつもりはなかつたであらう。私の視力をなくするか、私の義務を放棄するか、どちらか一方を選ばねばならぬ羽目になつていたけれども、私の決意はゆるぎもしなかつた。……だから、神の恵みをそしるやからに悪口をやめさせ、私をかれらの迷信的な空想の的にすることをやめさせ、かれらに篤と考えさせよ、私の立場はこのとおりであるが、私が恥じたり後悔したりするものではないということ。私の決意は確固として不動であるということ。私は神の不興をすこしでも感じて滅入っているのではないということ。それどころか、私はもつとも重大な時期に、神の恩寵と保護を十分に経験したことがあるということ。そして上天から私のなかに注ぎこまれた慰めと力づけがあつて、私はこの神の意図をはたすことができたということ。私は神があたえ

ようともしなかったものよりも、神がさずけて下さったものについて考える場合の方が多いであろうということを。要するに、私は謙直であることのみずからの意識を、他のどんな人のそうした意識とも交換する気にはなれないということ、そしてその思い出を、平静と歓喜との秘蔵の貯えだと感じているということ。しかし、仮りに、ぜひとも選択しなければならぬとしたら、君よ、私は君の盲目よりも、私の盲目の方をとるであろう。君の盲目は精神の上にひろがる雲であって、理性の光をも、良心の光をも暗くするのである。私の盲目は、事物の色どりの表面だけを私に見せないでおくが、美德と真理との美しさや安定性を、ほしいままに眺めさせてくれるのである。かつまた、私が進んで見たいとは思わぬものが、なんと多いことであろう。そして私が不本意ながら見なければならぬものが、なんと多いことであろう。しかも、私が多少なりとも見たい気のするものは、なんと少ないことであろう！ あの使徒(聖パウロ)が言ったように、弱さによって力強くなるみちがあるのである。(『フル人への書』(第十一章三十四節)) だから私を、生きているもののなかで、もっとも弱い生きものにせよ、その弱さが、私の理性的な不滅の魂の氣力を活気づけるのに役だつかぎり。私がつまれている闇のなかで、神性をおびて実在するものの光がひとしお冴えて輝くかぎり。そうすれば、私が弱ければ弱いほど、私は無敵に強くなるであろう。そして私が盲目であればあるほど、私はいよいよはつきり見えるであろう。ああ！ 私がそのようにして、弱さによって完成され、闇によって照らされますように！ しかも実際に、私は盲目であることで、神の恩寵にすくなくらず浴しているのである。私が神そのもののほかはなにも見ることができないだけに、神はそれだけにひとしお愛情と憐れみをもって、私を見て下さるからである。あわれなるかな！ 私を侮辱する人、誹謗して公衆の呪いに値する人は！ 神のおきては私を危害から庇護するばかりでなく、ほとんど私を、攻撃することのできない不可侵なものにするからである。それは私の視力の喪失によるものではなくて、むしろ、この闇をつくりだしたとも思われるような、あの天来の聖翼が影を投ずるからである。しかもそうした闇がつくりだされるときには、神はさらに尊い、さらに清らかな、靈の光でいつもその闇を照らすのである。(第一卷二

三六二
 三九頁

ミルトンの『英国民のための弁護』を反駁して、一六五二年三月に出版された匿名(著者はデュー)の『国王の血の叫

び』(Regii Sanguinis Clamor) には、アレグザンダー・モア (More, or Moir, or Morus) が手紙形式の序文をつけていた。それで、ミルトンはモアをその著者とみなして『第二弁護』を書いた。その執筆中にモアが著者でないという確報があったにもかかわらず、ミルトンはどこまでもモアを論敵にして槍玉にあげた。モアの序文では、「ゾツとするほど恐い、醜い、巨大な、盲にされたばけ物」だと言い、「だが実際は巨大ではない。こんな瘦せっぽちで、しなびた、血の氣のない形相はまたとあり得ないからだ。」と言い足して、ミルトンの容貌をこきおろしたのである。人身攻撃が当時の論争における最強の武器ではあったが、モアの酷評はミルトンの骨身によほどこたえたものと思われる。しかも、ミルトンの非行をあばく筆法で、事実あったことは針小棒大にし、なかったことは捏造して、そしてミルトンの失明は天罰だときめつけたのである。ミルトンはそうした誹謗をすべて『第二弁護』でとりあげて、一々弁明した。上記の引用文は失明に関する部分である。したがって、その述べかたに、負けおしみや、強がりや、誇張などがあったことは否めないであろう。しかし、そうした身構えはあったにしても、失明苦の現実に対処するミルトンのひたむきな誠実さが一貫していることと、そして終始ミルトンの高邁な気魄がこもっていることは、十分に認めなければならぬと思う。論駁の論陣の蔭で、みずからの確信と信念について、ひそかに自問自答しているささやき声があるのである。「市民としての自由」と「宗教の自由」とのために失明を賭した「公平無私の情熱」に悔いはなかったか。そしてそうした失明の事情のなかに神の「恩寵」と「保護」があったことを実感したのであるか。そして肉眼の光を失ったことのつぐないに心の光がいやました事実が立証されるのか。そのような信仰上の根本問題について、ミルトンは一つ一つみずから確認するような書きぶりで主張し、断言しているように感じられるのである。そして、ただひたすらに天与の「霊の光」(interior light) をぞいもつめて、敬虔な祈りをささげているのである。「神そのもの」以外にはな

にも見えない、「ただ立って待つ」盲目の身であつたからである。戦争の激した戦塵がおさまつて、親交のあつたフィララスや、かつては教え子であつて思想的にも共鳴するところのあつたシリアック・スキナーを相手にして、失明についても語るミルトンからは、なんのてらいも、けれどもない、しみじみとした信念と確信が吐露されたとみられる。しかしフィララスにしめした諦観と、シリアックにしめした行動性とは、ミルトンが『第二弁護』において、天与の「靈の光」に浴しうることをみずから確認した信仰にもとづくものである。

さて、『ソネット』第十九をここでも一度とりあげてみなければならぬ。ブラウンはそれについて、『ミルトンの失明』のなかでつぎのように述べている。

私は十九番目のソネットを読むと、もっとも深い感動を経験せずにはおれない。闘争をとまなわぬわけではないが、不可抗なものへの屈服と、ある生命的な欲求の犠牲とは、あらゆる失明者に知られている経験である。そのような経験がかくも真実に、單純に描写されたことを知るとは、苦闘することがあるときに、冷静と、言い知れない慰めをもたらすことである。私にとっては、ミルトンは、イギリスの一流の詩人らのなかに地位をしめるためには、この十四行だけを書けばよかったのである。(頁五)

一般の失明者にも落着きと慰安をあたえる効用がこのソネットにあるということは、要するに、ミルトンが人間の知恵と能力をかなぐりすてて、ただ一心一向に神の恩寵にとりすがる信仰の真諦に徹していたということである。そうした信仰の心境は、見かたによると、テイリヤードが一九三〇年の著書『ミルトン』で強調したように、「自己卑下の音色」(a tone of self-abasement^{〇頁})を感じしめるとみることでもできるであらう。あるいはまた、ハンフォードが一九四九年の著書『英国人ジョン・ミルトン』で断定したように、『国王の血の叫び』

を読んだ直後のミルトンの「一時的な敗北」(temporary defeat ゴランツ版 一七〇頁)とか、「降伏」(surrender 三頁七)とかいったような反応をしめたものとみることもできるであろう。しかし心得ておかねばならないことは、このソネットにおけるミルトンは、神に、対して、「自己卑下」をしたのであり、神に、対して、「降伏」したということである。それは我意と自力をすてて、「ただ立って待つものもまた神に仕える」ことを祈った姿であった。『闘士サムソン』におけるサムソンが、ふたたび神に選ばれて神に仕える機会を期待した姿勢であった。ところで、ティリヤードはつぎのように解説した。「このソネットでは、行動は受動的に神の命令に服することである。ミルトンは謙虚に期待しながらうずくまっている。さながらぶたれた犬が、目をかけてくれそうな気配をちよつとも主人がしめせば、すぐにも尾をふろうと構えているようだ。」(一〇頁) しかしながら、ミルトンは神に「ぶたれ」て失明したのではなかった。もしもそうであるならば、かれの論敵があげて言ったように、ミルトンの失明はまさに「天罰」であつたことになる。ミルトンが『英国民のための弁護』を書くにあたって、義務の放棄か、失明かの、二者選一のどたん場に立つて、ミルトンが自由意志によつて選んだのは後者であつた。すでに左眼は失明していたのである。医者たちが予告したように、使いすぎによつて当然ありうる右眼の失明をも覚悟していたミルトンであつたのである。ブラウンもつぎのように批判している。「ティリヤードが描写したぶたれた犬の態度は、私には判然としないし、読者の大多数が通例このソネットに見いだす高潔な忍従とは、ぜったいに両立しないのである。」(五二)そしてその「高潔な忍従」(lofty resignation)ということがこのソネットの焦点になつてゐるのである。そしてその焦点にあわせて写しだされたイメージが「ただ立って待つものもまた神に仕える。」(They also serve who only stand and waite.)という結句になつたのである。この結句の“*They*”は天使をさしているのか、人間をさしているのか、諸家の見解は一致していない。ヴェリティの註では、「他の天使たちもまた、――

上述の『何千』(天使)と対照して。」となっているが、ティリヤードの『コウマスと短詩数篇』の註では、「たぶん、他の天使たち、あるいはたぶん、人びと。」となっている。スマートの『ミルトンのソネット集』では、この結句についてつぎのように註釈をつけている。

この比較は、天国において神に仕え、そしてこの世界中に神の使命を伝達する天使たちと、ただ神慮に敬虔に承服して、そして神の意図の達成をおとなく待ちのぞむことだけによって、神の前にはとせられる、信心深い人びととの間になされている。旧約や新約の聖書の多くの章句では、waitという語は、ミルトンがここでそれにあたえた意味になっている。「エホバを待望め (wait on the Lord)」、雄々しかれ、汝の心を堅うせよ、必ずやエホバをまぢのぞめ (wait, I say, on the Lord)。(『詩篇』第三十篇十四節)……(一〇九頁)

省略した部分には、『詩篇』第三十七篇七節 (wait patiently for him) 『詩篇』第一百二十三篇二節 (wait upon the Lord our God) 『イザヤ書』第三十三章二節 (waited for thee) 『テサロニケ後書』第三章五節 (waiting for Christ) などの引用になっている。ところで、同じこの結句について、ヒューズは編書『復樂園・短詩篇・闘士サムソン』において、つぎのように述べている。

ミルトンはおそらく、天上界の第九天において、ビートルリスがダンテに対して、最高級の天使たちは、神の愛を行動に具現するという喜びにすらまさる、神を認識するという楽しみがある、と説明したことを覚えていたらしい。(『天国篇』二) ともかくもミルトンは「エホバの救拯をのぞみて静にこれ待つは善し」(『エレミア哀歌』第三章二十六節)と信じて満足していたのである。

このソネットの後半の文脈を文法的に読みとると、「神の命ずるままに、陸と海の上をかけまわる」かずかずの天使に対照して、「ただ立つて待つ」天使たちのことを指示した意味になるであろう。しかしこのソネットでは、天使のことではなくて人間のことを述べるのが主眼であった。二様のちがった天使があったように、二様のちがった人間があったことを暗示している。文面では二種類の天使の比較になっているが、裏面の文意では二種類の人間の対比になっている。神の使命をはたすべき人間のなかには、積極的に行動をする目あきの人びともあり、「ただ立つて待つ」盲目の人びともあるのであって、そして後者の一人がミルトン自身である、というふくみになっていると解釈すべきではないかと思う。なお結句の“stand”の意味については、『ルカ伝』第一章十九節の「われは神の御前に立つ（stand in the presence of God）ガブリエルなり。」をヴェリティは引用している。

ところが、一九五八年七月号の『モダン・ランゲイジ・ノート』誌上に、ジャックスン陸軍中佐とウィーズ陸軍大尉との共同執筆で、「Ⓐただ立つて待つもの」ミルトンの『盲目のソネット』と題する論文を発表して、“stand”の新解釈を提唱した。その論拠は、『エペソ書』第六章に用いられている stand の意味であった。引用は第六章十一節の「悪魔の術に向ひて立ち得んために（to stand against the wiles of the devil）神の武具を鎧ふべし。」と、十二節の「我ら血肉と戦ふにあらず、政治・権威、この世の暗闇を掌どるもの、天の処にある悪の霊と戦ふなり。」と、十三節の「この故に神の武具を執れ、汝ら悪しき日に遭ひて仇に立ちむかひ、凡べての事を成就して立ち得んためなり。（that you may be able to withstand in the evil day, and having done, to stand）」と、十四節の「汝ら立つに誠を常として腰に結び（Stand therefore, having your loins girt about with truth）正義を胸当として胸に当て、」とである。そしてこれらの引用文にある“stand”の意味は、「敵に対して攻撃または防禦の姿勢をとる」とか、「攻撃されるのを待ちかまえる」と、O.E.D.に定義してある意味だと主張されている。

そして上記の結句について、つぎのような解釈がくだされている。

……要するに、善きクリスチャンの義務は、聖パウロが述べているように（『テモテ前』【書】第三章）、悪の攻撃に対して防禦のできる構えで、油断のない歩哨に立つことである。そうした行動が、このソネットの結句において、ミルトンがわれわれやかれ自身にあたえる忠告の拠りどころであったのは、もっともなことである。（頁二）

つまり、“stand and waite”の意味は、自己防衛のために武装をととのえて、いつなんどきでも反撃することができるように、悪という敵の襲来を油断なく見張って、待ちかまえているクリスチャンの意欲的な行動性を言いあらわしたものだ、という主張である。さきに述べたティリヤードの「ぶたれた犬」とは正反対の、自信をもって武者ぶるいをしている番兵のすがたになっている。いかにも軍人らしい見かたである。しかしそれでは、“only stand and waite”とある“only”という限定はどういうことになるであろうか。それは単に、戦線で活動しているのではないというだけの意味であろうか。このソネットは、たびたび述べたように、神に直結する「あの一つの才能」が盲目のために封じられて、神の使命をはたせなくなった苦悶をとおして神にとりすがり、そしてそうすることによって、失明生活に新しい意義が見つけられるという信仰を表現したものである。悪魔や敵の攻撃を予期した戦闘意識を表明したものととは考えられない。

そこで、『ソネット』第十九の創作年代が問題になる。一六七三年に再版された『詩集』では、一六五五年四月のピーモントの大虐殺を題材にした『復讐せよ、おお神よ』というソネットの次に、このソネットが配置してある。D・H・ステューヴンズの一九一九年の論文「ミルトンのソネットの序列」（『ジ・モダン・フィロソフ』【シ】誌第十七卷二号）や、ハンフォ

ードの一九二一年の論文「ミルトンのソネットの配列と年代」(同上誌第十(八卷九号))を見ても、またグリアソンの一九二五年の編書『ジョン・ミルトンの年代順詩集』を見ても、このソネットの年代は定説のままになっている。スマー
トは一九二一年の『ミルトンのソネット集』で、このソネットについては在来の配列を踏襲しているが、つぎの
ような見解を述べている。

……このソネットは、この(失明)わざわいが起って間もないところに、そして暗闇のなかの生活に慣れる以前に書いたものであ
るから、落胆と悲しみの気分ではじまり、しんみりした忍従で終っている。その当時ミルトンは、かれの失明がかれの詩人
としての生涯を終らせたにちがいないと信じ、そしてかれが長いあいだ想を練っていた偉大な作品は、決して書けないであ
らうと信じていたように思われる。(一〇頁)

失明が「起って間もない」(fresh)ときで、そして暗黒の盲目生活にはまだ「慣れていない」ところと言うと、一
六五二年に接近した年代を暗示したもののように感じられる。ともかく、このソネットにこもっている気分が、
一六五五年の『ソネット』第二十二にみられる、やや明るい気負った気持になるまでには、かなりの年月を要し
たのではないかと思われる。ティリヤードは一九三〇年の『ミルトン』の付録で、このソネットは一六五二年
か、またはそれから間もないころの作であることを主張した。

内面的な証拠がいろいろ理由になって、このソネットが一六五五年に書かれたということは信じがたいと思う。ミルトンの
ソネットのすべての研究者のなかで、もっとも綿密なスマー
トは、それが失明の初期に書かれたと言っている。そしてこの
詩のぜんたいの調子がそういう風に暗示しているのである。ミルトンは盲目のために、かれの畢生の大作を書くには用をな

さなくなっていると信じている（「あの一つの才能が……わたしには無益に宿っている」）。かれは盲目にもかかわらず『第二弁護』（一六五四年）を書いたあとで、そうした信念をどうして述べることができたであろうか。「生涯の半ばならずして、わたしの視力が使いはたされてい、と思うとき」（When I consider how my sight is spent, e're half my days）とある。「いる」(is)であって「いた」(was)ではない。書いているときをさしているからである。一六五二年には、ミルトンは四十三才であった。その年齢をさしかれの生涯の半ばならずということは、すいぶん樂觀的である。しかし、かれが四十六才であった一六五五年に、その年齢をそのようにいうことは途方もないことである。もしもミルトンがかれの筆耕生に、このソネットを一六五五年（とは決して確かなことではないが）の稿本に清書させたのであるならば、かれはそれを一六五二年か、またはそれから間もないところに書いたのである。（三八頁）

テイリヤードのこの新説に対しては、一九四九年の著書『英国人ジョン・ミルトン』で、つぎのようなハンフォードの反論がある。

かれの失明に関する詩はすべて、ミルトンの晩年の心理にとってより深い意味をもつものである。最初（『ソネット』第十九のこと）のは、真の宗教的な受容を、——『第二弁護』で公表された神の特別な恩寵についての確信とはぜんぜん違ったものを、表現している。そうした理由で、このソネットを、一六四五年の『詩集』におけるその位置によって確定しているらしい、一六五五年より以前の時期のものにする必要はない。ミルトンの気分はむら気であって、かれが身を支えている観想は、場合と想定された聴衆とによって、さまざまに変るのである。（二一九頁）

文中に「一六四五年の『詩集』」とあるのは、「一六七三年の『詩集』」の誤記である。前者にこのソネットが収

録されるわけではないからである。ところで、後者は前者と同じように、ミルトンの指図によって、作品を創作の年代順に配置したと推定されていることが、ここで改めて無難に確認された形になっている。問題は、そうした推定についての再検討であったのである。失明したミルトンのむら気とか、観想の変様とかいうことも一理あるであろうが、ミルトンの信仰態度の根本にふれる論拠にはなっていないと思われる。またブラウンはつぎのように述べて、ティリヤード説に反対した。「ティリヤードは、たいていの正眼者と同じように、盲目について知っていることはほとんどない。そして知性の高い盲目者にとっては、そのハンディキャップがたえず実験になっていることがわかっていない。」^(五四頁)つまり聰明な盲目者は、盲目による障礙にぶつかる度ごとに、それを打開する新工夫を案出するということであるらしい。しかしミルトンの『第二弁護』は、そういう意味の新工夫ではなかった。また『ソネット』第十九は、失明者の実験や新工夫のいっさいが否定された心境を描いたものである。ハンフォードやブラウンの反論があるにもかかわらず、このソネットの創作年代については、ティリヤード説にしたがうのが妥当ではないかと思う。ヒューズも上記の編書で、クロムウェルをたたえたソネットの次にこのソネットを採録して、その末尾に(1652?)としている。ミルトンは、完全に失明したときから、かれが一六五三年に、旧約聖書の『詩篇』の第一篇から第八篇までの英訳詩をこころみたとしまでに、『ソネット』第十九を書いたと想定すべきではないかと思う。その英訳詩のこころみで、ミルトンが失明の心境をひきたてたり、慰めたりしたことは、ブラウンが主張したとおりであると思うが^(八五頁)、一六五三年にそうした試みをしたという事実は、ミルトンにものを書く「実験」をするだけの意欲が生じたことと、そして『第二弁護』の構想か、または草稿が進捗中であつたことを、臆測させるように思う。英訳詩の原文の内容からも推定されることである。

四

ミルトンのソネットで、二十三番にかぞえられる最後のものは、伝統的な定説では、ミルトンが一六五六年の十一月十二日に再婚して、そして一六五八年の二月三日（『バーカー説』「サ・レヴェュー・オヴ・イングリッシュ・ユ・スタディーズ」第二十一巻三九頁）に死なれた愛妻キャサリン・ウッドコックを、死後に夢にみて創作したことになる。したがってその創作年代を、ヴェリティは一六五八年と推定した。パティソンは“1658? AET. 50”と臆測して、このソネットの標題を“On his deceased wife”とした。マッソンも、ヴェリティも、同じ標題にした。ベルは〔TO THE MEMORY OF HIS SECOND WIFE〕とまぎれないように頭書した。スマートは無題にしているが、註釈では「ミルトンの最後のソネットはかれの二度めの妻、最愛のキャサリン・ウッドコックの死後に書いたものである。」（二頁）と断言している。ハンフォードも、ティリヤードも、同じ見解であった。ともかく、盲目で再婚した妻によせるミルトンの愛情のこまやかさが、このソネットによって例証されたことになっている。それだけに、初婚の妻メアリ・パウエルからうけたミルトンの痛手の深さが強調されたわけである。まず定説にしたがって、拙訳をこころみることにしよう。

Methought I saw my late espoused Saint

Brought to me like *Alcecis* from the grave,

Whom *Joves* great Son to her glad Husband gave,

Rescu'd from death by force though pale and faint

Nine as whom washt from spot of child-bed taint,

Purification in the old Law did save,

And such, as yet once more I trust to have

Full sight of her in Heaven without restraint,

Came vested all in white, pure as her mind :

Her face was veil'd, yet to my fancied sight,

Love, sweetness, goodness, in her person shin'd

So clear, as in no face with more delight.

But O as to embrace me she inclin'd

I wak'd, she fled, and day brought back my night.

見たと思つたのは、さきごろ娶つて、今は亡き妻か。

墓場よりつれもどされたのだ、アルセステイスの如く。

それはジョーヴの大力の子が、力ずくで死魔より救い、

蒼ざめやつれていたが、喜ぶ夫にかえされたのだ。

わが妻は、産褥のけがれのしみを洗われ、

古き法律の齋戒に救われたもののように

天国で、今ひとたびは、無礙にはばからず、

くまなく見むと、わが期していた姿になつて、

その精神の如く清らかに、身は白衣に包んで来た。

顔にヴェールがかかっていたが、わが想像の目には

ミルトンの失明をめぐる問題

愛、愛敬、淑徳のかがよう容姿が見えたのである。

かくもゆかしく、さやかに、その輝く顔はないからだ。

しかし、ああ、われを抱こうと、妻がさしうつつむくと、

目がさめて、妻は去り、昼はまたわが夜をもたらしした。

ギリシアのセッサリのフェーリ王、アドミータスの身代りになって、その妻アルセステイスは死んだ。しかし「ジョーヴの大力の子」であるハーキュリーズが冥府へ行って、「力づくで」アルセステイスをとりかえした。そして生きかえったアルセステイスは、無事に夫アドミータスのもとへつれもどされたのである。この物語は、ミルトンが愛読したユーリピデースの悲劇『アルセステイス』の主題になっていた。ところで、夢まぐらに立った亡き妻を見たミルトンの現実感、墓場からつれもどされた妻を見たアドミータスと同じ驚きと喜びに感激していた。ちがった点はつぎのことであった。アルセステイスはハーキュリーズの強力によって、生身のままに救われたのであるが、ミルトンの亡き妻は、旧約聖書の『レビ記』第十三章のモーセのおきてによって、分娩のけがれを清められた産婦のように、天国の浄化に救われて、産褥のけがれなき容姿を、ミルトンの夢のなかにあらわしたのである。現身のアルセステイスに対して、ミルトンの亡き妻はミルトンと幽明境を異にしていた。ミルトンにとっては理想的な婦徳であった「愛」と、「愛敬」と、「淑徳」とがにおやかに輝く容姿が、「想像の目」に見えたので、その顔面はヴェールでかくされていたけれども、ただちに「さきごろ娶って、今は亡き妻」とわかったのである。愛と愛敬と淑徳がこれほどに「さやかに輝く」容姿は、わが亡き妻を置いて他に比すべきものはないとわかったからである。ところが、その最愛の妻がさしうつつむいて、現身の抱擁をしようとした途端に、

目がさめて、夢のなかの妻の容姿は消え去り、そして外界はすでに夜明けであるのに、まぼろしの妻の消えたあの盲目の身は、また暗黒の夜陰に閉ざされていたものである。夢のなかの幸福感にくらべて、愛妻に死なれた盲目の現実はいまにも悲惨であつた。それだけに、夢幻の愛妻によせるミルトンの愛情は切実であつた。亡妻によせる、そしてそのためにことあたらしく失明によせる、ミルトンの人間的な愛別離苦は、切々胸にせまるものである。ミルトンをインヒューマンときめてかかる人びとは、すくなくともこのソネットを熟読すべき義務があると思う。

ところで、キャサリン・ウッドコックについては、スマーットの精密な調査をもつても、親族関係のほかはつまびらかでない。キャサリンとミルトンとの精神的な間柄を知る手がかりは、実はこのソネットひとつがあるだけである。そしてそうした手がかりが存在しているという理由によって、上述のように、このソネットは、一六五八年にキャサリンが死亡したのちに書かれたものだと推定されている。しかるに、このソネットの字句にはさまざまな疑義がさしはさまれるのである。そうした疑義を究明するために、W・R・パーカーは、一九四五年七月号の『ザ・レビュー・オブ・イングリッシュ・スタディズ』誌上で、「ミルトンの最後のソネット」という論文を発表した。そしてこのソネットの主題は、字句解釈の立場から言えば、ミルトンの初婚の妻メアリ・パウエルであるべきことを提唱して、学界に波紋をまきおこしたのである。一九四九年の著書『ミルトンとイギリス精神』のなかで、F・E・ハッチンスンはパーカーの提唱を支持して、「W・R・パーカー教授は最近、あの愛情こまやかなうるわしいソネット、『見たと思つたのは、さきごろ娶つて、今は亡き妻か』は、一七二五年らしい、通例かれの二度めの妻のことをさしていると解されているけれども、メアリ・ミルトンを記念するものだと提案した。このソネットでは、この詩人は、天国で、無礙にはばからず、くまなく見むと、すなわち、現世

の今の失明なしに見むと、期している。かれはかの女を今ひとたび見ることを期待しているのである。そういうことが、かれの二度めの妻について用いられることは、まずあり得ないであろう。かれはかの女と結婚するずっと以前にすでに失明していたからである。」(頁八) しかるに一九四九年一月号の上記の誌上で、フィッツロイ・パイルは「ミルトンの『さきごろ娶って、今は亡き妻』によるソネット」という論文をかかげて、パーカー説を反駁した。そして伝統説に有利な字句解釈をこころみた。するとパーカーはまた「ふたたびミルトンの最後のソネットについて」という論文を、同誌の一九五一年四月号に発表して、パイル説に反論した。この論争は、大体つぎの三つの論点にしばって考察することができる。

第一の論点は、一行めの“my late espoused Saint”である。ちなみにこの Saint は、ロックウッドの編書『ミルトンの英詩集用語辞典』の“holy person”とちがって、スマートやヒューズが註釈したように、『ウィンチェスター侯爵夫人の墓碑銘』の七一行の“Saint”と同じで、「天国にいる故人」の意味である。ところで問題は、my late espoused Saint となっているのか、または my late-espoused Saint となっているかという点にある。前のむすびつきだと、「私の最近に死んだ妻で、今は天国にいる故人」という意味になる。後のむすびつきだと、「私が最近に結婚した妻で、今は天国にいる故人」という意味になる。前者はパーカーが論拠とした新解釈であり、後者はパイルが支持する従来どおりの解釈である。パイルの言分によると、「最近に死んだ」という意味の late の用例は、ミルトンの詩には一つもないが、ただ単に「最近に」(recently) という意味にもちいられた late の用例は十七回もある。しかも『失楽園』第十巻の四三六―四三七行には、the late Heav'n-banish'd Host という相似例まである。形の上では Heav'n-banish'd は上記の字句の espoused と同じはたらきをしているのである。そこでこの場合、「最近に結婚した」という意味しかあり得ないとすれば、それは、結婚後わずかに一年四カ月足ら

ずで死亡したキャサリンのことになる。そうすると、その他のすべての疑義はたやすく解決されるとバイルは断言した。ところがパーカーは、「最近に死んだ」という意味の用例を、ミルトンの散文『偶像破壊者』(Eikonoclastes)から採りだした‘the late King’でしめし、さらに一九三六年の『ミルトン短篇詩集』で、トム・ピート・クロスが問題の字句をパラフレイズした‘my wife, who died recently and is now sainted’を証拠にもちだしている。パーカーの第二の論文では、「最近に私の妻であつて、今は天国にいる故人」という解釈も成り立つことを主張している。「最近に私の妻で」あつたという意味でも、「私の最近に死んだ妻」という意味の場合と同じように、キャサリンのほかに、メアリ・パウエルが考えられる。

第二の論点は“child-bed taint”(産褥のけがれ)をふくむ五行と六行にわたる詩句の解釈である。キャサリンは一六五七年の十月十九日に女兒を分娩して、翌年二月三日に死亡した。出産後三ヵ月半、正確には百七日を経過していた。「古き法律の齋戒」については、旧約聖書の『レビ記』第十二章に「婦女もし種をやどし男子を生ば七日汚るべし……その婦女は尚その成潔の血に三十三日を歴べし……若女子を生ば二七日汚るべし……またその成潔の血に六十六日を経べきなり」と規定してある。キャサリンは「女子」を産んだのであるから、「成潔の血」のために経過すべき総計八十日は二十七日前にすまして死んでいる。しかもその死因は肺疾であつた。ところがメアリ・パウエルは一六五二年の五月五日に、分娩後三日で死んでいる。「編者や批評家がすべて、このソネットを出産のために死んだ人妻に関するものと誤解したのは、たしかに正しかった。——そしてメアリ・パウエルはまさにそのようにして死んだのである。」とパーカーは力説した。

第三の論点は、七行と八行の“once more I trust to have Full sight of her”である。もう一度妻の全貌をあますところなく見ることを期するという意味は、「全貌をあますところなく見た」経験があつてこそ成立する

ものだとパーカーは主張した。つまり、失明以前のミルトンの経験を想起せしめる詩句だといふのである。ミルトンはメアリの死んだ一六五二年に失明して、それから四年後にキャサリンと再婚したのである。ところがパイルに言わせると、「今ひとたびは、くまなく見む」ことを期するといふのは、このソネットのなかで起つた事例をこそ前提とするものであつて、しかも生前に肉眼で見たことのないキャサリンであつたればこそ、夢に見た顔にはヴェールがかかつていたのであるし、それだからこそ「愛」と「愛敬」と「淑徳」といふような精神美だけが問題となつて、目鼻だちのことはなにひとつ認識されていなかった、という在来解釈が当を得たものであることになるのである。これに対してパーカーは、アルセステイスが墓場からあらわれたときには「ヴェール」をかけていたのであるから、ミルトンの妻の「ヴェール」はそれに照応させたものにすぎないと反駁した。そして「蒼ざめやつれて」いたアルセステイスはヴェールをかけていたために、夫のアドミータスは、自分の妻であることをはっきり認知することができなかったが、ミルトンの妻の場合には、ミルトンが生前の妻にそなわつたのを知っている「愛、愛敬、淑徳」というクリスチャンの婦徳が、ヴェールをとおして輝きにおつていたので、ミルトンはそれを感じすることによって、ただちに「わが妻」であることを確認したのでと主張した。ところで、このヴェールの問題については、失明者の立場からとも言分がある。ブラウンは『ミルトンの失明』でつぎのように述べている。

このソネットは「顔にヴェールがかかつていた」(“Her face was veiled”)という文節のほかは、単純で、解釈はたやすい。学者たちは従来この文節を解して、ミルトンは盲目であつたから、かの女の顔を見た経験がなかったことを暗示するものとみている。したがつて、ミルトンは夢のなかでかの女を見たのでないことを、かれらは指摘するつもりにちがいない。

見たのであるならば、こうしたひっかかりのあることばは、このソネットでは不適切になるであろう。私は、これがミルトンのぞむような解釈であるとは信じていない。ところが、かれは夢のなかで、ヴェールがかかっているの、その顔は見なかったが、かれの妻は見たと私はかたく信じている。しかし「ヴェールがかかっていた」ということは、私にとっては、ミルトンがかの女を見ることの無能力を暗示するものではない。盲目の人びとの夢に関する研究は、ヴェールがなかったら、ミルトンはかの女の顔を見ることができたであろう、という私の信念を確認する。(頁七)

そこでブラウンは、セント・ダンスタン訓練学校(欧州大戦で失明した英國軍人を収容した)の前校長で、大人になって失明したサー・アーサー・ピアスンの一九一九年の著書『失明の克服』から、かれの夢の経験談を紹介して、そのことから二つのことを指摘した。一つは、失明前に知っていた人びとは、夢のなかでは、あいかわらずはっきり目に見えるようにあらわれたことである。も一つは、失明後に知った人びとの顔は、その人びとがきわめて親しい間柄でなければ、ぼんやりしていたことである。それでブラウンはつぎのように述べている。

……このことは「顔にヴェールがかかっていた」ということについて学者たちの下した解釈が正しいならば、ミルトンの経験と奇妙に矛盾することになるようである。たしかにかれの妻は、かれには親しく知られていたのである。それでかれは、人相書があればそれによって、心中の絵像えを形づくることができたであろう。……もしもミルトンが「ヴェールがかかっていた」ことで、かれの妻の顔がぼんやりしていたことを意味していたならば、かれの知覚は、幼年時代から盲目になっている人のそれに似ていたにちがいない。目で見たとのこない人びとについてはさまざまな心中の像をもっている。その像は、ややぼんやりした輪郭きようかくになっていて「愛、愛敬、淑徳」のような特徴をもっているかもしれない。万一、心に描かれた人が實際目に見えたとしたら、そうした特徴は認められないかもしれない。しかし、ミルトンは大人のときに失明したのだ

から、ミルトンの場合がそうであつたはずはないであらう。

しかし私は、この詩人が指示するつもりであつたことは、かれがかれの妻を見た、ということだと確信している。(五七頁)

ブラウンはその理由として、一方において、ミルトンがかの女の顔にヴェールがかかつていたことを知っていたという事実をとりあげ、他方では、「昼はまたわが夜をもたらした」という意味が、ふたたび盲目に逆もどりの意味であるから、その寸前までは目が見えていたのだと主張した。そして『ケンブリッジ英文学史』におけるセンツベリのつぎの説をもちだした。「ミルトンはかれの妻を見たことがないことを暗示するものとして、このソネットのヴェールのかかった顔が、これまでたびたび注意をひいた。しかし忘れてならないことは、アルセステイスに類似の例では、ほとんどかならずヴェールをつけているということである。」(第七卷一三〇頁) ブラウンはまたさらに、「ヴェールは、経帷子の一部であるから、かの女が墓場から来たという着想を完結する。」と述べている。

ヴェールのあるなしにかかわらず、ミルトンは、夢のなかでかれの妻を「見た」ことをブラウンは主張しているのである。結果からみれば、パーカーの主張に一致するものがあるようである。アルセステイスのヴェールに照応せしめた点も一致している。しかしブラウンにとっては、ミルトンが夢に「見た」妻は終始キャサリンになつていた。「このソネットは、かれが切実に愛していた二度めの妻が、かれのもとへもどつて来た夢の記録である。」(五六頁)と明記した上での主張であつた。中年失明者である場合には、失明後の結婚であつても、それほどに愛し、それほどに親しみのあつた妻ならば、肉眼で見えるようにはつきりした絵像が心に描かれているはずである、という心理的な視覚現象を、他の中年失明者たちの実証にもとづいて主張しているのである。ミルトンは中

年失明者であるから、そうした妻の絵像がすでに心にやきついていて、それを夢のなかの幻影としてミルトンは「見る」ことができたであろう、とブラウンは推定しているようである。しかし中年失明者であった岩橋武夫は『失樂園の詩的形而上学』でつぎのように告白している。

……中年失明者なればとて事実を闇に想起する場合、特別の努力を払はざる限り、その対象は形態と色彩を取らずして、抽象化された観念として、来たるもので、この観念の何処かに感覚の印象が幾分付属してゐることである。中年失明者が夢を見ると、失明前の人物や事物は形をとって現れ、失明後のそれらは、ただ観念として浮ぶもので、著者の例をからは、母は顔形をとり、妻や子は声か或ひは或る種の性格を現はす観念として現はれる（失明後に結婚せる故に）。而もこの失明前の人物や事物すら、年とともに声化し観念化していくことを否み得ない。（三七）

ブラウンが論拠にしたサー・アーサー・ピアスンの場合とは、まさに正反對のことが述べられている。失明ということも、その経験内容については、生理的にも、心理的にも、個人差があるとみとめなければならぬようである。正眼者の場合と同様に、甲の失明者の意識現象や感覚現象は、乙の失明者のそれらと同一ではなからう。そうすると、ブラウンの主張にもかかわらず、問題をパーカーとパイルの論争にかえてもよいであろう。ブラウンの折角の主張も、岩橋武夫の体験の告白によって確実性がうすらぐからである。

さて、パーカーとパイルの論争における第一の論点では、パイルの方が有利であるが、第二と第三の論点では、パーカーの方が優勢であるように思われる。しかし第二の論点では、厳密にいうと、女兒出産のためのきよめの期間は八十日ということになっているが、それは、キャサリンが分娩してから死亡するまでの百七日にちか

い日数である。しかもキャサリンの死因になったという肺疾も、分娩のために悪化したとも考えられるであろう。第三の論点では、亡き妻を、その生前に見たことがあるとか、ないとかにかかわらず、ミルトン自身における「失明」という束縛が、天国へ行けば解放されるであろうという期待が実現され得ることを、ミルトンは確信して、「今ひとたび」と言い、「くまなく見む」ことを期していたのだと解釈することも可能ではないであろうか。パーカーはこのソネットのなかに、ミルトンにおける伝記的事実を読みこもうとする意図がありすぎるのではなからうか。ともかくパーカーは最後の結論として、まだ証拠は十分でないから、キャサリンかメアリかの判定は読者にまかせると言明している。そう言明しながらも、パーカーがメアリ説に傾いていることは、コンテキストや筆勢からみて歴然としている。しかるにパーカーは、ミルトンがメアリに対する愛情にかられて、このソネットを創作したとは信じがたいと断言した。この夢にみた妻がキャサリンであれば、愛情にかられて書いたことになり、メアリであればそうでなかったことになるのはおかしいと思う。仮りにパーカーのメアリ説が正しいとするならば、ミルトンの伝記と、それによるミルトン観は、大幅に修正されなければならないことになるはずである。ロバート・グレイヴズの一九四三年出版の小説『ミルトン氏の妻マリ・パウエル物語』(Wife to Mr. Milton: The Story of Marie Powell)では、ミルトンは峻厳と自尊心にこりかたまっているときでも、一方的ながらかなりの愛情を初婚の妻によせている。そしてそのことがすこぶるシニカルな効果をあげるような書きぶりになっている。なおまた、一八四九年のアン・マニングの日記物語『メアリ・パウエルの少女時代と既婚時代』(The Maiden and Married Life of Mary Powell, Afterwards Mrs. Milton)では、メアリが相愛的な愛情をもって綴った日記の数節もあるのである。しかし小説や物語は、批評でも研究でもない。ともかく、このソネットが一六五八年よりも以前に書いたものであるかどうか、解決のきめ手があるわけであ

る。そこで、このソネットの筆写をしたのは、一六五八年から六〇年にかけて、ミルトンのために筆耕をしたジエレミ・ピカードであったことを論拠にして、パーカーに反論しながら伝統説を支持したのもあった。それでもパーカーは、ピカードが一六五八年以前にも、ミルトンの筆耕生であったことが推定され得るのであるし、そしてまた、このソネットの筆写は清書 (fair copy) になっているから、その原本である草稿は一六五八年以前のものであると主張して反駁した。問題は未解決になるが、とにかく、ミルトンの伝記的な主題がなんであろうとも、このソネットは、ミルトンの傑作のなかに数えられるべきものであることを主張したのである。詩人の伝記的な事実が、詩の文学的な価値を決定するものではないからである。ブラウンもつぎのように結論している。「解釈がどんなであらうとも、このソネットは、ミルトンが夢のなかだけで、しかもほんの一瞬間だけ、かれがかくも勇敢に犠牲にした視力をとりもどし得たという実感によって高められた、切実に感情のこもる、愛情こまやかな、人間的な経験である。」(頁八) そしてそうした人間的な経験がミルトンの失明に起因するものであることは明瞭である。最後の行の「目がさめて、妻は去り、風はまたわが夜をもたらしした」(I wak'd, she fled, and day brought back my night.) について、デイヴィッド・デイズは一九五七年の著書『ミルトン』で、「それは自己憐憫をともしなわぬ喪失の鮮明な描写のゆえに非凡である。(テニスンもマシュー・アーノルドも、このような詩行は書けなかったであろう。)(三頁)と云っている。なるほどセンチメンタルなものはないが、それだけに深刻な「自己憐憫」がこもっていると感じられないであろうか。失明苦の現実を知る詩人でなければ書けない詩行である。失明に対するミルトンの諦観にゆるぎはなかったにしても、日常生活における現実の失明苦は、晩年にいたるまで、ミルトンの心底にまつわりついていたのである。

五

盲目生活における晩年のミルトンは、明暗の対照感がすこぶる鋭敏になっていた。『失楽園』第三巻の冒頭における「ミルトンの叙情的なモノログ」ともいうべき序詩をぬき書きしてみよう。

Hail holy light, offspring of Heav'n first-born,
 Or of th' Eternal Coeternal beam
 May I express thee unblam'd? since God is light,
 And never but in unapproach'd light
 Dwelt from Eternitie, dwelt then in thee,
 Bright effluence of bright essence increate.
 Or hear'st thou rather pure Ethereal stream,
 Whose Fountain who shall tell? before the Sun,
 Before the Heavens thou wert, and at the voice
 Of God, as with a Mantle didst invest
 The rising world of waters dark and deep,
 Won from the void and formless infinite.
 Thee I re-visit now with bolder wing,
 Escapt the *Skygian* Pool, though long detain'd
 In that obscure sojourn, while in my flight
 Through utter and through middle darkness borne

With other notes then to th' *Orphean* Lyre
I sung of *Chaos* and *Eternal Night*,
Taught by the heav'nly Muse to venture down
The dark descent, and up to reascend,
Though hard and rare ; thee I revisit safe,
And feel thy sovran vital Lamp ; but thou
Revisit'st not these eyes, that rowle in vain
To find thy piercing ray, and find no dawn ;
So thick a drop serene hath quencht thir Orbs,
Or dim suffusion veild. Yet not the more
Cease I to wander where the Muses haunt
Cleer Spring, or shadie Grove, or Sunnie Hill,
Smit with the love of sacred song ; but chief
Thee *Sion* and the flowrie Brooks beneath
That wash thy harrowd feet, and warbling flow,
Nightly I visit : nor sometimes forget
Those other two equal'd with me in Fate,
So were I equal'd with them in renown,
Blind *Thamyris* and blind *Mæonides*,
And *Tiresias* and *Phineus* Prophets old.

Then feed on thoughts, that voluntarie move
 Harmonious numbers; as the wakeful Bird
 Sings darkling, and in shadiest Covert hid
 Tunes her nocturnal Note. Thus with the Year
 Seasons return, but not to me returns
 Day, or the sweet approach of Ev'n or Morn,
 Or sight of vernal bloom, or Summers Rose,
 Or flocks, or herds, or human face divine;
 But cloud in stead, and ever-during dark
 Surrounds me, from the cheerful waies of men
 Cut off, and for the Book of knowledge fair
 Presented with a Universal blanc
 Of Natures works to mee expung'd and ras'd,
 And wisdom at one entrance quite shut out.
 So much the rather thou Celestial light
 Shine inward, and the mind through all her powers
 Irradiate, there plant eyes, all mist from thence
 Purge and disperse, that I may see and tell
 Of things invisible to mortal sight

(1—55)

かたじけなや、射しくる聖なる光、天の初子よ、

永遠なる神の、同じく永遠なる光、と名づけても
不敬とはなるまい。神は光なりで、永劫いにしえの古より

神は近づきたい光のなかだけに住まっていたゆえに、
創造されたものではない、煌かな実在きざうの、煌かな発光きつこうよ、

汝のなかにこそ神は住んでいたわけだから。それとも

光源は誰にも知られぬ、清らかな流れの靈光と

呼ばれるのを好むか。太陽のある前に、

天空のある前に、汝は存在そんざいしていて、

神のみ声で、汝はマントの如く覆い包んだのだ、

杳しょうとして形なき「無限」から勝ちとった

暗い、深い、盛りあがってくる大海原を。

汝のもとへ、われは今、さらに放胆に

翼をはばたいてたち戻る、地獄うみの湖からのがれて、

その暗い旅先には長く滞留うかんしていた。その間

さいはての闇や、中部の闇を飛翔ひせうして通り、

オーフェースの豎琴とじやみにもまさる調べで、

「渾沌」と「常闇とじやみの夜」を歌ったのだ、

暗い下降斜面を、臆せず降ることも、難攻して

成就することは稀だが、それを昇って還ることも、

聖なる詩神に教えられて。さて無事に汝のもとへ戻って、

われは、生気づける汝の靈驗の灯を感じる。

しかし汝はこの目には戻って来ぬ。目はきよろついて、

滲透する光をさがすが、甲斐もなく、昼の明りは

見つからぬ。厚い黒そこひが眼球の光を消したか、

白そこひが暗幕をかけている。それでもなお、

聖い詩歌がたまらなく好きだから、澄んだ泉か、

蔭深い森か、日の照る丘か、とまれミューズの神々が

足しげく通う処でさまようことを、われはやめない。

だがなканずく汝を、サイオンよ、そして汝の清浄な

山裾を洗って、せせらぎ流れる麓の花咲く小川を、

われは夜毎に訪れる。また片時も忘れかねるのは、

われと運命を等しくした、(願わくば名声をも

等しくしたいものだが、)このとくに二人のもの、

盲目のタミリスと、盲目のメオニデス。それに

古代の予言者、ティレシアスと、フィネウス。

ついで、糧となるのは、諧調の詩に

自然に生気をふきこむ、思想である。

それは、目ざめている鳥が囀にうたい、いと深い

森蔭にこもっていて、夜曲を奏でるようなものだ。

かくて年とともに、季節は還ってくるけれども、

われには、昼の明りも、忍びくる夕べや朝の楽しさも、

春の花の眺めも、夏のバラも、羊や牛の群も、

人間の聖らかな顔も、還つてはこない。

代りにわれをとり巻いているものは、雲と、

永劫の闇だ。人びとの活気づく営みからは

遮断され、目に見える「知識の書物」の代りに、

われには、自然が造った一切のものについての、

なすって掻き消した、白紙の全頁が提供され、

唯一の入口からはいる知恵は、閉めだされている。

それだけにさらにたやすく、汝、天の靈光よ、

心のなかで輝け。心のすべての能力にみなぎって

心を照らせ。心に眼を植え、心から

すべての霧を一掃し、消し散らせ。肉眼には

見えぬことをわれは見て、語りうるように。

『失樂園』の第一巻と第二巻において千八百行にあまる長さで、地獄と渾沌界と、そこでの出来ごとを描写することに没頭していた作者が、ひるがえって天上界のことを題材にするにあたって、地獄の闇からのがれて天国の光のなかに浮びあがった感激をうたったものである。そしてただ単に、暗がりから明るみへ出た喜びだけでなく、人間が帰還すべき本源の「聖なる光」につつまれる歓喜が横溢しているのである。その光は「天の初子」であり、初子であるけれども、創造されたこの世の光ではなく、永劫の太初から存在して、神と永遠とともにする

光であり、神の光であった。「煌かな実在きんざいの、煌かな発光はつこう」であり、「光源は誰にも知られぬ、清らかな流れの靈光」であった。「神は光なり」(God is light)とて『メハネの第一の書』の第一章五節のことに表明された神聖な神秘が、これほどまでに実感をこめて描写されたことは、まさにミルトンの失明の現実をとおして、そしてそれのみによって、可能であったといえるかと思う。失明者の心眼に射しこむ光であったからである。それは、肉眼で見る現世の光の創造者が、永劫の住まいとする光であった。そうした光の光源にむかつて、ただひとすじに凝視する心眼にのみ見える光であった。無限を見わたし、永遠を見とおす可能性をさずかった心眼でなければ、感得することのできない光であった。肉眼の煩惱の光が消されることによって、心の純潔な地肌を照して輝いてくる神の光であった。さきに述べた『第二弁護』のなかのミルトンの信念について、かさねて引用してみよう。

……あの使徒が言ったようにに、弱さによって力強くなるみちがあるのである。だから、私を、生きているもののなかで、もっとも弱い生きものにせよ。その弱さが、私の理性的な不滅の魂の氣力を活気づけるのに役だつかぎりには。私が、つつまれている闇やみのなかで、神性をおびて実在するものの光がひとしお冴えて輝くかぎりには。私が弱ければ弱いほど、私は無敵に強くなるであろう。そして私が盲目であればあるほど、私はいよいよはつきり見るであろう。ああ！ 私がそのようにして、弱さによって完成され、闇によって照されますように！ しかも実際に、私は盲目であることで、神そのもののほかは、なににも見ることができないだけに、神はそれだけにひとしお愛情と憐れみをもって、私を見て下さるからである。(批点してんは筆者)

ミルトンは失明したことによって、とくに神の恩寵に浴するものであるという信念をいだいていたのである。「闇によって照され」という逆説がなりたつことをミルトンは確信していたのである。失明の暗黒のなかで、

「神性をおびて実在するものの光がひとしお冴えて輝く」からである。したがって、「私が盲目であればあるほど、私はいよいよはつきり見る」ことが可能になるのである。『第二弁護』でミルトンがこのように断言したことは、論敵を意識した虚勢が多少はあるわけであるが、しかしこの『失樂園』第三巻の序詩では、この確信と信念を身をもって実証する気魄がみなぎっているのである。それは、ミルトンがすでに八九年になる失明生活の体験によって、ゆるぎなき不退転の信仰を身につけていたことにもよるが、それと同時に、明暗の対照をますます鋭敏に感じとるかれの感性によって、現世に照る光とはちがった光を知覚する官能がそなわっていたからであらう。しかしまたその反面において、反作用的に、そうした感性が、盲目の闇の実態をさらに強度に感じとることにもなっていた。うつしみの身のミルトンにとっては、この世の太陽は「生氣づける靈驗の灯」であった。ミルトンはそれを「感ずる」ことはできたが、それはかれの目には見えなかった。「昼の明りは見つからない」のである。朝も夕暮もないのである。花鳥風月の楽しみは得られない。「人間の聖らかな顔」も知ることはいかない。目あきの人びとのように、活気のある活動はやれないのである。自然の景色や、自然のつくりだすものや、森羅万象についての知識がはいってくる「唯一の入口」は閉ざされて、あたえられるものは全頁が「白紙」の本である。人間としての、そして詩人としての、現世の楽しみはないわけである。盲目のミルトンをとりまいているものはただ「雲と、永劫の闇」だけであった。こうした失明の悲境に対するミルトンの自意識は、『闘士サムソン』において、鉄鎖につながれた、盲目のサムソンにつきのような独白を言わせるのである。

O dark, dark, dark, amid the blaze of noon,

Irrecoverably dark, total Eclipse

Without all hope of day !
O first created Beam, and thou great Word,
Let there be light, and light was over all;
Why am I thus bereav'd thy prime dercee ?
The Sun to me is dark
And silent as the Moon,
When she deserts the night
Hid in her vacant interlunar cave.
Since light so necessary is to life,
And almost life itself, if it be true
That light is in the Soul,
She all in every part; why was the sight
To such a tender ball as th'eye confin'd ?
So obvious and so easie to be quench't,
That she might look at will through every pore ?
Then had I not been thus exil'd from light;
As in the land of darkness yet in light,
To live a life half dead, a livng death,
And buried; but O yet more miserable !
My self, my Sepulcher, a moving Grave,

Buried, yet not exempt

By privilege of death and burial

From worst of other evils, pains and wrongs,

But made hereby obnoxious more

To all the miseries of life,

Life in captivity

Among inhuman foes. (80—109)

ああ暗い、暗い、暗い、真昼の光輝のさなかに、

どう取り返しようもない暗さだ、まっ暗闇だ、

昼の望みは全く絶たれた！

ああ、最初に創造^{つく}られた光よ、汝、大御言^{おおみこと}よ、

「光あれと言^いい給^{たま}えは総ての上に光ありき」という、

重大なその神勅^{かみさし}を、われはなぜこのように取消されたか、

太陽も、われには暗い、

しかも、光は射さぬ。

夜^{よる}をおきざりにして、光を休める

晦^{つもとろ}の洞^{ほら}に隠れた月のようだ。

光はかくも生命に欠くべからざるものであり、

光は五体のすべてにあるから、魂にもある、

というのがまことなら、光は生命そのものとも

言えそうだ。それではなぜ視力が、こんなに
危^{あや}くしくさらされて、こんなに光の消えやすい
もろい目玉なんかに閉じこめられたのか。

触覚のように全身にみなぎって、あらゆる毛穴から
のぞき見られるようになせしなかったのか。

そうしたら、光から追放されて、暗黒の世界で、

しかも光のなかにありながら、生ける屍となり、

埋^うめられて、半死の生活はしなかっただろう。

だがおお、このさらに辛^{つら}いみじめさ！

己れが己れの墓だ、動いている墓だ。

埋^うめられていながら、

災禍のなかでも最悪の、不当な刑罰を、

死と埋葬の特権によって免れることもない。

それどころか、それゆえにいやまして、

ありとある生きる不幸にさらされる。

囚われの身の生活^{くらし}なのだ、

血も涙もない敵のさなかでの。

ブラウンは、この最初の三行を、そのもう十数行前からとりあげて、つぎのように主張した。

……こんな泣き言は、ミルトンの敵たちによって自叙伝的だと考えられたならば、かれらにとって、凄く意地わるい満足のたねになったであろう。そのような満足を、ミルトンがいさぎよく与えることは絶対になかったであろう。かれはいつもかれの敵を気にしていた。表現が意識的にせよ、無意識にせよ、この嘆きは、ミルトンがかれの他の作品で表明した感慨とは、毛頭一致するものではない。(頁七)

サムソンがすなわちミルトンでないことは言うまでもない。そして盲目の原因や事情も異なっているが、しかしミルトンにとつては、サムソンの盲目はミルトンの盲目になっていた。かりにミルトンが失明していなかったとするならば、これほどまでに、サムソンの盲目の心境にたちいった描写はできなかったであろう。また、ミルトンの詩作の才能とサムソンの強力とは別種のものであるが、どちらも、そうした天与の「あの一の才能」を自覚して、そしてそれによって神の使命をはたすべきことを自任していた点は同様であった。サムソンは敵国に囚われの身であり、ミルトンは、かれ自身とは氷炭相容れぬ主義主張の時代にあつて、逼塞していたのである。ブラウンの主張にもかかわらず、サムソンの盲目についての描写には、ミルトンの自叙伝的な色彩が濃厚であることを認めないわけにはいかない。『失樂園』第三巻の序詩におけるミルトンの告白と読みくらべればわかることである。敵に弱味をみせるとか、みせないとかいうことよりも、もっと高邁な芸術意識がミルトンにあつたはずである。ハンフォードが一九二五年の『シェイクスピア・ミルトン・ダンの研究』で、『闘士サムソン』は芸術作品であつて、偽装した自叙伝ではないことを、われわれは直ちに認めようではないか。(頁七)と述べたことをブラウンは援用しているが、それは、ブラウンの論拠とする対敵意識を支持したものではない。岩橋武夫は「サムソンの光に対する歎きのうちに、ミルトン自身の痛ましい経験の跡を泌々辿ることが出来る。」(頁四五)と断言し

た。しかしサムソンの「悲慘の運命を歌ふ心は、唯單なる仮想のサムソンに非ずして、詩人自らの独白であることを見逃し得ない。」(同上)という全面的な自叙伝説になっていた。

さて、重要なことは、ミルトンが失明の現実をとおして、人間的な苦しみに悩んだということであり、そしてそうした悩みによって「靈の光」を体験したということである。ミルトンは失明によって、肉眼で得られるいっさいの知識と知恵を奪われたのであるが、『第二弁護』で述べたように、「進んで見たいとは思わぬ」多くのものを、そして「不本意ながら見なければならぬ」多くのものを、見るわずらわしさを免れたのである。そして「肉眼では見えぬこと」を見る心眼が、「天の聖光」によって「植え」つけられたのである。肉眼で見えないものは、直接であれ、間接であれ、ミルトンにとってはすべて神につながるものであった。そして心眼はそれすべて、鋭敏な明暗の感性によって理解した。明暗は、神の絶対の觀照のもとに展開する闘争であった。闘争と明暗ということが、すでにミルトンの初期の作品からテーマの課題になっていた。『キリスト降誕の朝によせる頌歌』がそうであり、『コウマス』も『リシダス』もそうであった。それは、ミルトンの氣質的なものの表現であったとみられる。ミルトンの個性の地肌になっていた純潔性が、嚴正な選択をするからであった。しかしミルトンにおいて、闘争的な明暗が神に即して本質的な展開をするのは、かれの失明が契機となったものである。失明によって、ミルトンの明暗の感性が体験的に研ぎすまされたからである。それと同時に、觀念的な領域を脱しきれなかったミルトンの信仰が、失明によってその真諦に徹したからである。このことをもっとも有力に立証するのは後期の三大作、とくに『失樂園』である。P・E・モアが『シェルバーン・エッセイズ』第四集で、『失樂園』の「真の主題は樂園である。失われた樂園ではなくて、『あの楽しいひなびた場処』(that happy rural seat 第四卷二 四七行)である。」(三四頁)と述べて、明るくて楽しい樂園が『失樂園』のハイライトになっていて、そしてその前

後が暗く陰鬱な場景になっていることを説いたことは、明暗の單なる対照という点からは興味ふかい。しかし『失樂園』における明暗は、ミルトンの他の作品と同様に、鬭争的に配置されているのである。さきにかかげた第三卷の序詩にみられる明暗の鬭争的な対照は、その縮図にほかならない。最後に、ミルトンが身をもって信仰の真諦を悟得した事實は、ミルトンの失明が機縁となつて、『ソネット』第十九にはじまり、『闘士サムソン』のサムソンによつて実証されたことを、改めてしるしておきたい。

(一九六一年九月)

補 記

一、ミルトンの失明とかれの詩のスタイルとに關する問題については、T・S・エリオットの二つのミルトン論によつてその要点が究明されていると思われるが、そのことはすでに拙著『ミルトン研究』のなかで紹介したので、この問題は、他日、ミルトンの文体について構想をまとめ得る機会に再検討してみたいと思う。

二、近著の新聞と雑誌に、本稿に關連する二つの論文が載つていた。『タイムズ文芸付録』の一九六一年九月十五日号の 'The Date of Milton's Sonnet xix' By C. J. Morse と 'Studies in Philology' の一九六一年七月号の Thomas Wheeler: 'Milton's 'Twenty-Third Sonnet' である。モースの論文では興味ある推論をこころみただち、『ソネット』第十九は、「一六五二年の夏にミルトンが完全失明になつた直後の何か月かのあいだ」に書いたものだとしてさしつかえないと見ている。ホイラーの論文では『ソネット』第二十三の亡き妻は、キャサリン・ウッドコックでもなく、メアリ・パウエルでもなく、ミルトンが心中に抱いていた「理想」の妻を描いたものだと言張し、さらにミルトンには「かれ自身を劇化する傾向」があるので「かれの孤独と損失感を劇化するために、かれの夢をよりよきものにしたので」と結論した。傾聴に値する節もかなりあると思われるが、このソネットにみなぎっている現実感を無視したきらいがあると思う。